

『ジョン・ダン入門』

―背信と野心の詩人―

ジョン・ケアリ著

朝倉秀之訳

第四章 野心の技法

ダンの技法は、詩でも説教でも、個性を表現している。それも前章で足跡を辿ってきた通り、自己昇進をはかったり、不安に駆られたり、満たされることのない個性である。その技法の個性の表わし方は、いつもはつきりしているとは限らないし、はつきりしていてもその技法がいつもこちらが好ましい印象を持つとは限らないのである。もちろん、そんなことは取るに足らない。作者の中に求めることは、受けがよいことではなく、その世界を経験させる別の道を示してくれる表現力である。しかし、ダンの個性が批評家の反感を買ってしまったこともあったし、個性など存在しないのだという振りをしてしないで、最初から個性と取り組んで、個性がダンの書くものの特異な圧迫感と複雑さの不可欠な前提条件であることを示すことが一番であろう。ダンが詩的技法を使って運良く帳消しにできるような不利な条件では少しもないのだから。

カデイツ港の海戦は、見てきたように、そこにダンが一五九六年

にいたのだが、それについての二つの対照的な記述が適切な出発点を提供してくれる。最初のものは、遠征の副司令官であったローリ卿によるものである。スペインのガリオン船が英国艦隊に驚いたとき、スペインの乗組員たちは捕虜になるのは目に見えていたから、錨を滑らせて、自分たちの船を座礁させてしまった、とローリ卿は詳しく述べている。

海に浮かぶ兵隊たちの塊りに出くわす。幾重にも重なって、まるで石炭を一度に沢山の荷役口の袋から飛び出させてしまったみたいだ。溺死しているの者もいれば、泥水の中にはまっただらけの者もいる。フィリップ号とサン・トマス号は自ら燃えた。サン・マタイ号とサン・アンデレ号は乗組員たちが火を放ちに出掛けないうちに、英国の船と共に延焼を免れた。その光景はスペイン側から見れば、とても悲しむべきことであつた。というのは、沢山の者が溺死し、半分は焼けて水の中に飛び込んだ。とても多くの者が船の脇のそばのロープの端でぶら下がっている。唇のところまで水に浸かつて。多

くの者が痛ましい傷のまま泳ぎ、水中に打ち叩かれて、苦痛から解放される。それにも関わらず、火はとても大きくなつて、偉大なフリリップ号の中の大砲の疾風のように、火がスペイン側に来ると、地獄そのものを見たいと思つている人間がいたら、地獄がそこで最も生き生きと描き出されていた⁽¹⁾。

この光景は、同じくダンのエピグラム『燃えた船』の主題でもある。

燃えた船から、投げ出された兵隊たちは

ただ溺れるだけで、決して炎から救い出されない

敵の船の近くに来たときはいつも、

敵の砲撃で破滅した

そのようにすべての者は死んで船の中で見出される

海で焼死したまま、燃えた船で溺れたままに⁽²⁾。

ローリー卿のサン・フェリペ号の死の苦しみの記述とダンの記述とを比べると、必然的にローリー卿の記述の持つ優れた人間性に感動する。ポルトレス〔荷役口〕から押し出された兵隊たちは、黒こげになったり、炎に包まれていて（ローリー卿の時代、「石炭」は燃えさかつていたりとか燃えさしになった残り火のことである。）地獄の中の人たちのように「悲しげである」。水の中でもがいているときに撃たれ不具になった兵士たちは「苦痛から解放」され、その語句の中に同情がある。ダンは冗談みたいに殺戮を扱っている。それを口実にした手厳しい逆説である。ダンの詩行には哀れみの心が無い。この詩について道徳的態度を持ち込むのは馬鹿げているだろう。

ダン若い兵士だったし、初めて殺戮を見たのである。自らを強靱にしなければならなかったし、感じる余裕も持てなかった。さらに、ダンの複雑で独創的な詩は、単純な哀れみを言い表すには合わなかった。「もしなければならぬ」として、陳腐なものを表現するのはとても難しかったであろう」と若いアイザック・ローゼンバークが言うのは、友人からダンの詩の一篇を借りていたからである⁽³⁾。

その意見はローゼンバークとダンの両方の状況を説明している。しかし、ダン他人に対する苦しみと比較的免疫になっていたのであって、詩的技巧の単なる副産物というわけではない。詩や散文という作品を通してそれが分かる。ダンの冷淡さに驚くことがある。たとえば、刑場の見物人たちが足を引っ張って絞首刑の囚人の死を早めるのを叱責する。十七世紀の絞首刑は通常効率が悪かったし、犠牲者の友人たちは長く苦しまないようにこの方法に頼った。彼らは心得違いをしているとダンは主張する。正義は「苦痛の死」を宣告しているのだし、勝手に解釈してはいけない⁽⁴⁾。その上、恐怖を抑えるのは難しく、ダンは説教の中で全く日常的に述べるときがある。

「疲れ果て、夕方ロンドンに向かっていく人は、刑場に行くのが楽しい。なぜなら、それが町の近くにあるのを知っているからである⁽⁵⁾。」『燃えた船』の無情に喜んでる調子は、実際にダンの性格の中の気の毒に思う気持ちがないことと呼応する。それはダンのキリスト教の教えの中にさえ出てきている。たとえば、ノアの方舟で救われた家族が溺れている他の人たちを見たときに感じたに違いない「筆舌につくしがたい慰め」についてダンが熱心に詩を作っているのを知る⁽⁶⁾。これに似通っているのは、十七世紀の田舎をさまよって歩く乞食や落ちぶれ果てた人々の惨めな群れをダンが激しく嫌悪していることである。このような社会のはみ出し者たちが立派な地位に

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

ある人々の心の奥底に入り込ませた普遍的ともいえる恐怖心と憎悪を差し引いても、ダンの猛攻撃の激しさは人々を不安にする。「張り出し玄関や納屋に屯しているあのような浮浪者や手に負えない無頼漢の群れの大部分の者たちは、洗礼を受けていなかった」とダン⁽⁷⁾は強調する。結果として、連中の苦しみを取り除くのはキリスト教の務めではない。もしそんなことをすれば、神からの保証は得られないであろう。物乞いをする連中は正式に結婚もせず、子供をつくり、最も墮落した金持ちがなる以上に貧乏の中でもっと邪悪になつてしまふ別の重大な犯罪行為を行う。その上、本当に望みさえすれば簡単に仕事を手に入れることができるのである。選んで怠け者になつている。ダンがその貧困者を「犬ども」とか「鼠ども」とか公然と非難することに耳を傾けるとき、容赦のない刑罰は、ダンの時代に法律が宿無しや失業状態の者を罰したりしたが、正にこのような考えから一般の人々の支持を得たことに私たちは戸惑つてしまふ。

これらのダンのキリスト教の証例の中に表れる潜在的自己愛は、同じようにダンが友人や家族を取り扱う方法とつなぎ合わせてみると、時として注意を引きつけられることがある。ヘンリー・グッドイヤー卿宛の手紙で彼の妻の死に際して哀悼の意を表したとき、ダンは自分自身の言い分を例にあげてグッドイヤーの言い分に同情する。「君を慰めることなどできはしないが、貧乏人が貧乏人に与えるときだけできる無難な施しである。なぜなら、ほくは君よりそれを貰う必要がさらにあるからだ⁽⁸⁾」それは慰めの手紙の中に今まであつた一番奇妙な記述の一つであるに違いない。手紙を書いたとき、時としてダン⁽⁹⁾は不遇で惨めに感じていたことは否めなかったが、死別を容認したことはなかった。その状況の中でダンの自己憐憫は常

軌を逸するとまでは言わないにしても気が利かないように思える。不思議に思うのはグッドイヤーがダンの哀悼を表す厚かましい便りに憤慨したのか、それともあまりにもダンの利己主義に慣れすぎて気がつかなかったのか。

同じように自己陶醉という不幸な例は、一六二七年にダンのお気に入りの娘の死後になされた説教に出ている。父としての悲しみは、もちろん明らかである。ルーシーが居ないのではないと思わせるために、一度も他で取り上げることのない「死は見えないけれど、地上でお私たちのまわりにいるかもしれない」という考えに執着している。しかし説教の主要な論点は、ダンが信仰による不屈の精神で自分の不幸を耐えることで、通常の苦しい経験をしてきたキリスト教信者よりも「より良き復活」に預かる資格を獲得するだろう、と言うことである。その極点に達する箇所は、ダン自身の栄光に満ちた復活の状態を表現する言葉を厳粛に模索している。私たちはダンがそんなにもやすやすと娘の死を来世での自分の約束に利用する手段に変えてしまつていて、と知つて心を乱す神無き、感傷的な現代人である必要はない。天国で自分の娘に相見える喜びが、価値ある全てである、と思う。しかし、その説教が終わりを告げる高められた想像の爆発の間にあつて、天上の至福というあの特別の側面は実際のところ述べられないのである。⁽⁹⁾この文脈の中の別の説教で、ダンの救いに更に打撃を与えるものというよりむしろ「両親や子供たちを奪ふことで」神が罰したという意味のダンの祈りを思い起こす⁽¹⁰⁾。関わりのある子供たちや両親がその計画に熱心ではないかもしれないことが、ダンには思いつかないようである。

ダンの利己主義に関するこれらの意見は人間としてのダンを矮小化するつもりで提出されているのではなくて、そのことで幅が広が

るであろうと思う。論じたいことは、自己への集中がダンの詩の中で個性と表現力の源になることである。この自己への集中がこの社会的、宗教的な流れの中で私たちをその気にさせ道徳的な憤りをおこさせることにもなる。ダンが詩人として年がら年中と言ってよいほどに自己陶醉であるのは、ロベール・エルロットが見事に述べてきた。⁽¹¹⁾ ダンが窓ガラスに彫りつけたのは女性の名前ではなく、自身自身の名前である。「別離―嘆くを禁ず」の中で「ぼく」が不在の間、残していく恋人あるいは妻に起こるかもしれないことについては何も述べていない。関わりが出てくるダンに起こるかもしれないことこの恐怖である。「葬儀」はダンの身体の運命についての思索であつて恋人の運命ではないのである。一般に『ソングズ・アンド・ソネット』の中で哀れを誘う役割は男性に振り当てられる。ただ一つ『熱病』だけはその女性が苦しんでいるのを表現している。

芸術的な価値は、自意識の中であつて、とても強烈なので完全に観察できるかのように自分自身を客観化しがちである。彼が絵姿になつたり、骸骨になつたり、鏡の像になつたりする。「絵姿による魔術」の中でのように、

ぼくはぼくの眼をきみの眼に凝らす、すると

あわれぼくの絵姿はきみの眼の中で燃えており

ぼくが視線をしたに向けるとこんどは

ぼくの絵姿は一滴の透明な涙に溺れているのが見える⁽¹²⁾

映し出される小さな苦悩は、私たちが頼りなげに夢の中で見る哀れで、遠い自己の苦悩のように観察される。同じ自己陶醉によってダンはお互いに細かに調べ注射することが出来る一つひとつに自分

自身を分裂させている。「花」の中でダンは自分の心に話しかける。それは情け容赦のない恋人の言いなりになっている。

哀れな花よ、

おまえは明日、あの太陽の目覚めぬうちに

この太陽とぼくとともに旅立つというのに。⁽¹³⁾

その知らせは、まるで何も知らぬ部外者のように優しくその心に伝わる。ダンは自分の中の不和にとてもきめ細かく注意を払っているから、細かく分けることによってのどんな風を感じるのかを伝えることが出来る。むしろ、同じように「愛の成長」の中でまるでダンが入り組んで分裂したある有機体の機能を観察しているように、愛についての春の効果を記録している。

ぼくは自分の愛を純粹だと思つたことがあつたが、

いまはそれほどだとは信じない。

なぜなら、ぼくの愛は草のように

世の辛酸と季節の苛酷さを経ているからだ。⁽¹⁴⁾

自己診断はダンの利己主義と密接な関係があつた。ダンは自らを訓練し、自分自身の精神分析医となつて、職業の中でも一番価値のあるものだと思つた。手紙の中で言っているように、魂の一番高貴な行為は「魂自体を黙考し、熟考し、黙想する」ことである。⁽¹⁵⁾ しかし、自己分析の魅力を認識していると同時に、自己分析的に出来ないことも認識していた。思考するのは自分しかいないから、歪めることなく自分自身を考えることは出来ないのである。正に見てきた

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

ように、ダン自身について詩的に客観化することは、ダンの範疇を越えて手に入れようとする試みであったが、上手に客観化されたものについて自らを欺かなかつた。「ぼくたち自身は」と『否定的愛』の中で正確には「ぼくたちが知らないもの」であると、きつぱりと主張している。「ぼく自身は、その判断が最も難しい対象物」のままであつた。ダンはグッドイヤー宛の手紙でその要点を巧妙に述べた。「精神病の中には、基準も正典も規則も無い。なぜなら、私たちの趣向や理解や解釈がその判断するものになるべきであるからだ。そして、それがその病気そのものである。」自分の精神を使つて実験したり、雰囲気支配しようとする企ては、ダンが示すように「ぼくはなおぼくの病気を誤診する」という診断のこの生来の難しさの故に大低は失敗してきた。ダンは自分自身を知ることが出来ないけれど、他の誰よりも試してみようとする気持ちがあるから屈せずやり過すのである。「ぼくがそれを知らないなら、誰もそれを知りえない」⁽¹⁷⁾その上、「謎に満ち、混乱させる、迷路のごとき魂」というダンの自虐の性質に加えて、自己認識が出来ないことで、その追求は抑えがたいものとなつた。

だから、ダンの利己主義は密接に創造的過程に繋がっている。その結果、ダンの詩は他のいかなる英国詩人の詩よりもっと深く自己の刻印を持っている。詩が「ぼくは」とか「ぼくを」とかで一杯になつているなどと言つていのではない。ダンの「ぼくは」や「ぼくを」はいつも頑固な代名詞であり、読者がその代名詞を盗用するのを許さないであろう。他の詩人たちの場合、私たちの内なる実現の役割としての詩行を受け入れて、彼らが話す「ぼくは」とか「ぼくを」になりきるのである。私たちがワーズワスの詩を読むとき、

そしてぼくは感じた
今の時を、高まる思いのその喜びに
満たされて、今ぼくは悩む。

私たちが語っている「ぼく」自身である、と想像するから、威厳があるような、さらに厳肅な気持ちになるのである。ダンは自分自身がこんな風に解釈されたいとは思わない。ダンの詩はダンと言う妥協を許さない塊りである。それが、C・S・ルイスのような批評家の敵愾心呼び起こす理由なのである。そのような批評家は、詩には刺があつたり、個性的である必要はなく、神話のように玉石混淆で、従順で、魅了するものがあればよいと考えていたからである。

ダンの恋愛詩の中での話者の利己主義を特徴づけるのに、ロベール・エルロットは「ル・ナルシスム・ドウ・ラマン(自己愛)」⁽¹⁸⁾について述べる。フランス語でいくらか適切であるとしても、英語のナルシズムをダンに当てはめると、すぐに誤解を受けてしまう。だからこそ私たちはダンの詩が示す利己主義というものをもっと厳密に定義できるかもしれない。不思議なことに、ダンの詩は自己陶醉してはいるが、自惚れてはいる。その詩の気質は自惚れるには落ち着きが無過ぎる。また、ワーズワスと比較してみると、良く分かる。「高められた思い」の持ち主であることをダン自身が私たちに伝えていなどとは想像できないからである。自己満足などでは、ダンの切迫した複雑さを乗り切ることができなかった。さらに、ダンの自我は、あまりにも熱心に自我そのものを越えた対象を追い求めすぎて、ナルシストになれないのである。自我はその不完全さのゆえに苦しむ。このことを見ることが出来るし、たとえロベール・エルロットがダンにしては珍しく我を張らないものとして選んでい

る詩『熱病』の中でも、ダンの利己主義が持っている焼き尽くす力を見ることが出来る。

死ぬな、きみが逝けば

ぼくはすべての女を憎んでしまふ、

きみもそのひとりと思いつけば、

きみを讀えられないから。

その女性が死ぬと、彼女に対する記憶が損なわれることになり、それが根拠となつて、ダンには彼女が死ぬのを思いどまらるようにつてゐるのである。彼女の置かれた立場は彼女のものというよりむしろダンのものとして扱われる。私たちが推測するように、彼女の生命というよりむしろ危篤状態にある女性をダンがどう見ているかである。論理的に見ると、ダンの自分勝手さやそれを表現する適切で大胆な方法は息を飲むほどである。きみが死ぬば、きみを「讀え」ないだろうからという理由で、死なないでほしいなどと言われることは、なんと我慢のならないことであろうか。だが、詩行の生み出す効果は、もちろん思いやりがある。というのも私たちはダンが言うことからその意味することまで完全によく理解できるからである。彼女に対する愛や彼女のことを考える特別のやり方は彼にとつても重要だから、そのことが同じように彼女に重要ではないなどと思いつかないのである。熱心に彼はそういうことが危険にさらされていると彼女に警告するのである。論理は自我のごちゃごちゃした一番熱心に奮闘しているものに対して無頓着である。「死ぬな」という命令は自然ではあるが、非論理的である。何故ならその女性は好き好んでそうしているとは思われなからである。

その詩が進行するにつれて、ダンには自分の個人的な思索に夢中になり、その女性の苦境をある種の慰めへと焦点をあわせるために、医学的、氣象学的、天文学的理論の間をくまなく探し回った。ダンが一時的に立ち止まり、「きみ」と呼びかけてから「彼女は」に変化するの、ダンが心を奪われて楽しんでゐる印である。

しかし彼女はこの火で消滅するはずもないし、

この間違つた責め苦を長く受けるはずもない

多くの腐敗が必要なのは

こんなに熱病を長引かせるためなのだ

燃える熱病は流星にすぎない

きみの中の物質はすぐに燃え尽きる

きみ自身である美しさと肉体は

変わるこたなき天空

だが、熱病はぼくの思いそのもの、きみを捉えて離さない

きみの中に留まり続けることはできないとしても

だからぼくはきみを一時間所有したい

他の全てを永遠に所有するよりも

愛の身勝手さは、その最後の二行の中に挑戦的に断言される。ダンには彼女を所有したいと思う。そして、そう願うのは彼女を慰めるためではない。ダンは、たとえそれが熱病のように彼女を燃やして消滅させてしまうことになつても願うのである。所有という愛の概念は、現代に生きる私たちの考え方を傷つける。私たちは今では、

まるで男性は女性の個性を尊敬すべきであると信じているみたいにながら自分の致命的な渴きを述べる。

『熱病』には別の側面があつて、そこで露骨な身勝手さとは違つたダンの苛酷に要求する性格が描き出している。その愛される女性が単純に愛される女性として述べられているのではない。普遍的な重要さを担っているのである。ダンが公然と主張するように、彼女が死ぬとき、この世は消えて無くなる。

それとも、この世の魂のきみが逝き

この世が残つても、その時はきみの抜け殻

どんなに美しい女も、きみの亡霊

どんなに立派な男たちも 蛆虫にすぎない

これが典型的なダン特有の途轍も無さである。太刀打ちできないものに向かつていく感情の昂揚はダンの詩のいつもの形である。ダンの魂は駆り立てられ絶頂に到達するのを感じる。描き出されているその女性が取って代わられるのも特徴的である。わくわくする状態のなかで、その女性が宇宙の元素とか、比類無き力と徳の象徴に変身させられていることが分かる。ダンは言葉の持つ危ない縁でバランスをとり、努力して最高のものを言い表そうとし、あらゆる個人の特性を備えたその女性は、何千フィートも下降へ見えなくなる。

こんな風に最高のものに憧れるのは、ダンの苛立ちの自然な捌け口であることが分かる。自分が出世できずに失意の中にあつたばか

りでなく、彼自身の纏まりのない気紛れに苛立っていたからである。ダンが切望するものは、まさに本来的には達成できなかった。後に、この飽くことのない魂の貪欲さが神の摂理への特別な道であると考へるようになって、死ぬことのない人間を力説した。ダンが説明する神は「この人生が人間に施すことができる以上の際限なく解決できない欲求」を全ての人々に植えつけてきたと言う。⁽²⁰⁾しかし、この理論を唱えないうちから、ダンは詩で超克することがあることを明らかにしていた。ある面で、この気質のお陰で、へつらいの技法が昔よりダンの性分に合つたのである。詩が始まるか始まらないうちに、背後にある単なる事実を残し、実際的な分野を目指すことができるベッドフォード伯爵夫人やハーバート夫人への賛辞を詩で語つたのである。『周年詩』の中で現実からでてくる感情の高まりは統制するのに簡単ですらあつた。なぜなら、全然エリザベス・ドゥルリーを知らなかつたので、彼女についての真実の印象を持つ機会は今無かつたと言うわけである。絶対的なものの間を自由に急上昇したり、螺旋降下することができた。

ダンが『周年詩』中のエリザベスについて言うことは、『熱病』の中でその女性について言うことと非常に一致している。しかし、もちろんエリザベスについての詩はかなり長い。エリザベスは、もう一人の女性のようにこの世の魂であるか、または昔そうであつた。「その形態はこの世を生かした」彼女が死んだ今となつては「この世は抜け殻にすぎない」人間はその中で飼育される「蛆虫にすぎない」のだ。地上に残るいかなる美德もエリザベスの「幻」にすぎない。ダンは同じように『熱病』の女性のようにエリザベスの本質はあまりにも病気に純粹すぎて攻撃できなかった。なぜならそれは天体の本質に似ていたからである。⁽²¹⁾主張は同じようである。

しかし、言うまでもなく、『熱病』の中にはエリザベス・ドゥルリーを扱うための何かがあることは疑いのないことである。ダンが彼女のために書いた詩は最高のものを切望する常套句を表現しているし、人口に膾炙した言葉でそうしているのである。

さらに広大な『周年詩』はダンの着想の枠を広げている。感覚のいかなる形態からもゆつたりと切り離されているから、その詩は贅沢な曲技飛行で上へと浮き上がる。私たちが推測するようにエリザベス・ドゥルリーは創造された宇宙を墮落から守った。人類全ての行いがその価値を得るのは実に彼女からなのである。彼女は図書を全て読み、彼女の目は金を西インド諸島へともたらし、彼女の胸は東インドを香水で包んだ。「このようにこの世のものを二十倍にするために、彼女の中には十分な資源があつた。喜びに溢れ、不条理な主張は何ページにもわたり続く。同時に、エリザベスが死んでから、この世の身の毛のよだつ状態が熱心に解剖される。ダンが書いた他のものはこのように自由自在に創意工夫を伝えないし、あまり充分に貪欲さを満足させるとは言えない。

『周年詩』についての本当に驚くべきことは、その詩集が引き起こした批評の誤解である。ベン・ジョンソンが初めに述べたのだが、詩集は「神聖冒瀆に満ちて」いるし、もし処女マリアについて書かれたのであれば、「立派なものであつた」⁽²⁴⁾しかし、ジョンソンは紛れもなく自分がへそ曲がりであることを充分承知していた。かなりはつきりしているのは、ダンを自分の詩の論争に巻き込もうとしていたことである。ダンが黙ったままでいれば、そのことが難しかったにちがいない。その上、ジョンソンの策略は成功した。ダンが答えたのである。「わたしは女性のアイデアを描いたのであつて、彼女がそうなのではない。想像したとおりそれは充分にごま

かしのないものだったが、批評家たちはそれをうそだと思つてしまつた。「確かにその女性の死によって太陽が地球に落ちてくるというアイデアの働きだと思ひ込んでいた」とウィリアム・エムプソンは異議を申し立てている。しかし、ダンには「アイデア」という言葉を「アイディール」という十七世紀の一般的な意味で使つていたのであり、ダンにとつて「アイディール」は現実の全く力の及ばないままでなければならなかつた。ダンがジョンソンに言つたことは『周年詩』を詩作するにあたり、あきらかにダンが持つていた最高に完全なものを心に描くことであつた。

ダンの率直な説明を無視して現代の学者たちはダンが『周年詩』の中で「本当は」何について書いているのかを発見しようと頭を悩ませてきたのである。それが奇想天外な結果を生んでいる。「ダンの詩の中の宗教的犬儒主義」⁽²⁵⁾についての論文でマリヤス・ブーリーは『周年詩』は「悪い冗談」であり、そこでのダンはエリザベス・ドゥルリーを山車にしてローマ・カトリック教会を密かに讃えているのであるという理論を提唱している。D・W・ハーディングが提案しているのは、その詩の主題はダンの母親、もしくは子供として抱く完全な母性の理想像みたいなものであり、衰えるにつれ、それによつて世界は望みのない場所になってしまう。リチャード・E・ヒューズはその証言をはつきり無視して、その詩は聖ルーシー⁽²⁶⁾についてのものであると断言し、フランク・マンリーは『周年詩』の版でダンが実際にはシェキーナを描いている——「神」からの万物の流出という神秘主義のやり方の中で最後のセフィラスである——神がこの世界に内在する存在であることを表している。

批評的思考はその場その場で一致している。もしも詩人が特殊な言葉を使えば、普通の人ならその種の言葉が価値あるものだと考え

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

る主題に違いないと推測するし、それに応じて批評家はあれこれ捜し求めて発見しようとする。着想の文学への研究方法として、こんなことは見込みが無いように思えるし、その取り組み方は研究者の間に懸念を与える。その上、バーバラ・K・レワルスキーの『周年詩』についての本は、仮説に基づいた重要な主題を慎重深く捜し求め、ダンが神のイメージについて書いている概念を見つけようとしている。その神のイメージは、エリザベス・ドゥルリーが生まれ変わった魂⁶⁰であるという理由で彼女の中にある恩寵により取り戻されたものだといっているのである。これに対する明確な反論は、神のイメージは生まれ変わった魂全ての中で取り戻されているのに、ダンがエリザベスを唯一のものとして扱うのである。その詩の事実に合わせてしようとするレワルスキー女史の理論の失敗は彼女自身が認めている。それを「逆説」として論じているからである。しかしながら、それで単純にその理論を擁護できなくしている。

ダン自身の説明に立ち返ってみると、私たちがダンの着想の習慣で知っていることと完全に一致するのである。ダンはそのアイデアを追い求めていた。考えうる一番誇張した事柄を具体化するために言葉をのばそうとした。それは誇張のまだ発見されていない空間への旅であった。友人たち宛の手紙でダンがうんざりしながらもこれは自分がしようとしている言葉だと何度も言い聞かせた。強調したのは全体の事柄は一番エリザベス・ドゥルリーとの関係が希薄であったことに尽きることである。「なぜなら、わたしはその淑やかな女性に一度も会っていないので、ただ真実を語ることを誓ったのだということを理解してもらえないからである」。その計画としては「わたしが理解できる最良のもの」を描き出すことであつた。自らの着想をその限界へと導くためである。

その制作状況を考えると、『周年詩』を形成している一つの公平な批評はそれほど悲しみを表現してはいないということである。このことを鑑賞できるのは、ある無名の詩人がエリザベスの妹ドロシーのためにその数年まえに書いた弔辞と比較してみるときである。ドロシーは4才で死んだのだつた。

小さい彼女は多くを約束されて

あまりにも早く解き放たれた

ただ生きるのを夢みただけ

そして死んでしまった。

比較してみると、『周年詩』は吹奏楽団のように腹の奥から悲愴さを漂わせる。しかし、それでダンが悲しみに打ちひしがれていると思うのは的外れであろう。エリザベスの死は、ダンにとってごく幸運なことであつた。なぜなら、そのことでダンは、私たちが見てきたように、自らを新しい庇護者へ推薦すると同時に、精神に安らぎを与える目も眩むような称賛のカデンツァを書く機会が与えられたからである。

ダンはまたエリザベスが背後に置き去りにしてきたこの世の卑しむべき状態の興味深い記述を詩の中に組み込むことができた。たぶんジョセフ・ホールからこのための考えを手に入れたのである。ホーステッド教会の牧師で、ドゥルリー夫人の親友であつた。この世は墮落しているという信念を「巧妙に持続させて」いることで大学では名が知られていた。ホールは『周年詩』のために前口上の詩を補い、印刷が終わって本を点検した。だから、ダンがホールのお気に入り理論を本の中で公表することは適切だつた。しかし、どん

な場合でも、その主題はダン自身の気質に合わせた。世間が自分を取り扱ってきたやり方に辛いものを感じたし、自分の不満が輝く別の世界の理想を創造する場合と同様に地球とその住人たちを大規模に弾劾することで、ほっとすることができた。『熱病』のような『周年詩』は二つの便法を組み入れることができる。

ダンがエリザベス・ドゥルリーのために書いた完全への讚美の歌は、全作品の中で野心の技法が一番確認される例である。(ロバート・ドゥルリー卿の行為をあてにして、もちろん詩は散文文体で興味本位でなく野心の技法を表している)詩はゆつくりした調子で聖なる詩であり、詩の中で大志を抱く注目すべき気質が、どのようにダンの初期の時代にその技法をもつと世俗的な主題に取り入れていたのかを示すために、エレジー『寝に行く恋人へ』を取り上げることができ。これは七つのエレジーの一つであり、(他には『腕輪』、『嫉妬』、『アナグラム』、『心変わり』、『香水』、『絵姿』がある)このエレジーは、手書きのままで一五九九年以前の日付をつけることができる。それはダンが書き(最初は『腕輪』であるが)二番目に残ったエレジーである。そして私たちが推理するようにダンの二十代初めに属している。リンカーン法学院の学生のときである。印刷するにはあまりにも猥雑すぎたと考えられた。だから、ダンの息子は一六三三年に纏めた父親の詩集の初版から取り除いた。引用するには長い詩だが、退屈ではない。

さあ、大切なあなた、ぼくの精力が休息を求めるのは、
 ぼくが疲れて、疲れて寝るまでです。
 時には敵同士が、睨み合い、
 一戦も戦わずに、立ち疲れる。

腰当てをお外しなさい。輝く天のオリオンの帯のようだが、取り巻いている遙かに美しい世界がそこにあるのだから。寶石のちりばめられた胸飾りをお取りなさい。着けていると、せつちちな馬鹿どもの眼が釘付けだから

胴衣の紐をお解きなさい。その心地よい時計の響きがぼくに
 閨房入りのときを知らせてくれるから。

その幸せな胸当てをお取りなさい。そいつを妬んでいる、
 そんなにも近くにいつもじつと立っていられるから。

あなたがガウンを脱げば、とても美しい国が現れる
 まるで花咲く牧場から丘の影がそつと抜け出る時のように。

あなたの銀製の頭飾りをお取りなさい。
 そして、髪の毛の小冠をお見せなさい。

その靴をお脱ぎになって、この愛の神聖な神殿
 この柔らかな寝台に安心してお上がりなさい。

このような白い衣裳を着て、天使たちはいつも
 男たちに迎えられた。天使のあなたは

マホメットの楽園のような天国をもたらず。そして
 悪霊も白装束であるが、ぼくたちは容易く

天使と悪霊をこうして見分ける。
 悪霊は身の毛がよだつが、天使は身の子がよだつ。

ぼくの両の手が彷徨うがままにさせなさい。
 後ろに、前に、上に、間に、下にへと。

ぼくのアメリカ、新発見の地よ、
 ぼくの王国、一人の男が治める時が一番安全で、

ぼくの寶石の鉱脈、ぼくの帝国、
 あなたをこうして発見して何と幸福なことか。

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

このような絆に入ることは、自由になること、

その時、ぼくの手が置かれるところに、ぼくの印が押される。全く何も纏わぬ姿よ、あらゆる喜びはあなたによる。

魂が肉体を抜け出るように、肉体は全き喜びを味わうために何も纏ってはいりません。あなたがた女性が用いる宝石はアタランテーの玉のごとく、男たちの視線にさらされる、愚か者の目が宝石に注がれると、

この俗な魂は女性ではなく、その宝石を欲しがります。絵でも、本でも楽しい表紙が一般受けするように、どんな女性もそのように着飾る。

女性自体が神秘の本で、女性が購う恩寵に権威づけられたぼくたちだけが見なければならぬ。その時、ぼくは

産婆に躊躇いなく見せたように、あなた自身を知ることができただけから。全てを投げ出して、そう、そのこの白いシャツも。

ここには天幕はないし、まして無垢ではない。あなたに教えるために、先ずぼくが裸になろう。男を着ればそれ以上何が必要だということのか。⁶³

ここで横暴な「ぼく」は自分の従順な犠牲者の女性に脱ぐように命じたり、自分が硬直して困って(ダンの「立つこと」の冗談)いることに注意を向けたりしているが、もちろんポルノの影の世界の相も変わらない住人であり、恥や社会的状況を通して女性との関係が難しい男には幻想的な役割として特に魅力的である。しかし、その一般的なパターンにも関わらず、その詩には注意するに値するダンらしい特徴がいくつかある。

その性は強烈に経済的色合いを滲ませている。女性の着るもの豪華さに強調点がある。彼女は「輝く」腰当てを着けている。胸衣(「胸当て」)は高価な宝石が「ちりばめられ」ている。閨房入りのときを知らせるその「心地よい時計の響き」は彼女のものである。十七世紀に貴重な玩具で宮廷の婦人や裕福な市民の妻だけが持たたいとお願ひすることができた。(時計はいくつかあるが、ダンが説教の中で何年か後で、おそらく昔を懐かしがって、述べることになつた「宝石付きのものがそれに当たる」)その「銀製の小冠状頭飾り」は特に暗示的である。「小冠状頭飾り」という言葉は金とか銀の環の意味で使われ、どんな社会階層の婦人のお抱え美容師でも入念に作る事ができたが、最初のころは、貴族階級の男女が被つた小冠のことだった。ダンがその力量を試すうつとりするような魅力ある女性は、暗示するように、貴族階級の人かもしれない。『トゥックナム庭園』の詩人はすでに、偽りの階級との愛の結合を見出している。この点で、ダンが作り上げてきた状況は、性的な野心だけではなく、社会的・財政的野心をも満足させるのである。幻想が持つ豪華なアクセサリはダンにとってストリップそのものと同じくらい重要に思えるのである。

そのどちらよりもさらに重要なのは支配しようとするその心である。これは女性との関係を規制はしない。ダンのエレジーは同様に他の男たちより優越していることを表している。詩は関わる女性の贅沢さをはつきりと表に出すけれど、このような思考に裏打ちされた人々を蔑むことなのである。ダンが述べる女性たちは商人(「せつかな馬鹿ども」)や他の浅ましい輩の気を引くために宝石をつけている。ダン自身がその価値をもっと高く感じる少数派に属しているのである。このようにダンには挑発して高邁な精神と自堕落な精神と

が同じように響くようにしているのである。同様に、ダンは宗教的な言葉の働きを披露する一方で、宗教に対する無関心をひけらかしている。魂が「全き喜び」を経験するために肉体から離れるにちがいないという教義に言及し、それが購われた恩寵であるというプロテスタントの信仰にも触れる。(すなわち、人となりたもうたキリストの正義) それによって人類の救いが可能になったのである。これらの神学的に微妙な事柄が、猥褻な詩の中に入り込んでいて、宗教の持つあの護教的で嘲弄的な扱いを備えている。私たちが見てきたように、それを生み出しているのがダンの背教なのである。

このような戦略でそのエレジーは、ダンの描く黄金崇拜者たちや同じように神を畏れる人たちを越えた優位性を達成する。ダンは最初の人たちと付き合うには洗練されすぎているし、二番目の人たちの迷信に取り込まれるには頭が良すぎる。ダンの軽蔑はうっとりする犠牲者だけではなく、人類の大きな部分にまで及ぶ。さらにダンには、自分の調子と文体で頭が一杯になっていると言われている主題の上に自分自身を上昇させている。丁度『熱病』の中のように、二者択一の主題によって置き換えられるその病気の女性に対する特定の意図があった。その主題はダンの詮索癖に答えている。詩が進むにつれて、そこでのダンはますます傲慢に関わることになる。衣服を脱ぎ捨てる女性への直接の関心は一時停止の状態となる。詩の頂点は、裸についての一般的な賛辞であり、私たちが参加したかもしれないようなこの特別な女性の解剖学的長所の人物調査記録ではない。事実、それがエレジーの主題であり、その欲望の一般的な雰囲気であれば、驚かすものとして出て来るのは、初めから終わりまでその女性の髪の毛以外身体の中の部分にも言及せず、唇や足の爪にさえも、まして胸や太腿にも触れていないことを理解するため

である。たくさんのエリザベス朝時代の好色文学の中でドゥ・リグール(是非とも必要)であった女性の肉体の舌なめずりするような概説(例えば、トマス・ナツシュの楽しめる『ヴァレンタインの選択』^{en}を参照)は影を潜めている。比較してみると、ダンの世界は高尚で抽象的である。ほとんどその女性を見ていないようであるが、値踏みするような目が脱ぎ捨てられる着物にまわりつく。

ダンが「花咲く牧場」からそっと抜け出る丘の影の繊細で、暗示的なイメージを採用する仕方は、このように全く見ていないことを示しているかもしれない。その女性が着ているものを脱ぐときの名残惜しそうな仕種は挑発的に「こっそり抜け出る」という動詞が表現している。しかし、実際にガウンを脱ぎ捨てることで彼女の代わりに残るものは、「花咲く牧場」に視覚的に似ているものではなく、彼女の白いシュミーズである。このことはダンが数行後で明らかにしている「白装束」である。「花咲く牧場」が作り出す色彩豊かな印象はこの何もない白で打ち消されている。事実、イメージは視覚的段階では湧かないが、精神的には湧くのである。嬉しい心の高鳴りと意外性と目も眩む明るさの感じは、突然に雲のない田舎の風景を見るという経験と一人の女性が着るものを脱いで行くのを見る経験とを結ぶものなのである。ついでながら、その詩は寝室であることを忘れていたような書き方を示していて、私たちはその女性がまだシュミーズを付けているのかどうか終わりまで分からない。ダンがなお最後の四行を放棄するように勧めてはいる。「白いシート」はシュミーズかもしれないが、彼女をくるんでいるベッドの単なるシートかもしれない。「天幕」についての言葉遊びは、悔悟者たちが一カ所に立つ必要があったから、シートを暗示しているが、その女性が詩の何処かでシュミーズを脱ぎ捨てていたなら、ダンはその

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

ことに言及するのを省いた。

そのエレジーが卓越している最後の要素は、それはまた私たちに『熱病』を思い起こさせ、『周年詩』を含むたくさんのダンの詩にも当てはまるのであるが、その女性を拡大して何か普遍的に承認された重要なものにする好みである。このエレジーの場合、一つの大陸全体である。「ああ、ぼくのアメリカ、ぼくの新発見の地」この描写の言葉を使うことで、ダンは公的な世界を私的なことで閉じこめることができる。ダンは恋愛詩だけではなく、この世的な成功の頂点を極めたと感じられたし、恋する男ではなく、支配者である。「王国」と「帝国」はベッドでは思いのままである。

『日の出』の中で、ダンのこの王権への要求はまばゆいばかりに詩の核心に置かれている。

せつかちで年老いた馬鹿もの、手に負えぬ太陽よ

なぜこんなに早くから

窓を通し、カーテンを通してぼくらを訪れるのか。

お前の運行通りに恋人たちの季節が巡らなければならぬのか。

生意気なその教師面よ、朝寝坊の

生徒や仏頂面の丁稚でも叱っていたらいい

宮廷の獵人どもに王のお出ましぞ、と告げたらいい

田舎の蟻どもに冬ごもりの仕度をせよ、と命じたらいい

愛とは不変のもの、季節も気候もありはしない

時刻も日も月も変わり無い、そんなものは時間のぼろきれ。

お前の光がそれほどに神聖で強いものと

なぜお前は思うのか。

光ぐらい瞬き一つで翳らせ曇らせてやれるのだが

彼女の姿を見失いたくないからしらないだけ。

もし彼女の眼に眩んでめくらにならなかつたら、

いいか、明日の朝ぼくに教えてくれ

胡椒と金銀の出る東西二つのインドが昨日

見た場所にあるか、それともぼくと一緒にここに寝ているかを。

昨日会った王たちは何処にいたかを聞いてみるといい、

みんなこの寝台に寝ていた、と答えるだろう。

彼女は全ての世界、全ての王はぼく

他の何者でもない。

王たちはぼくらの役を演じているにすぎない。これに比べれば、
全ての榮譽は物まねで、全ての財宝は安物の金

太陽よ、お前の幸福はぼくらの半分

世界がこうして縮小したからには。

お前の歳では柔もしたいだろう。世界を暖めるのが

お前の務めなら、ぼくを暖めれば済むことだ。

ここでぼくらを照らすといい、全世界を照らすことになる。

この寝台がお前の軌道の中心で、この部屋こそお前の巡る天球だ。⁽⁸⁾

「せつかちの年老いた馬鹿もの」という語句によつて、私たちは『寝にゆく恋人に』の中の女性がアメリカになるように、この恋人は東西のインドになる。エレジーの中の軽蔑と傲慢はここに持続する。しかし、この詩を解釈するとき批評家たちはその堂々とした表情に裂け目のように現れる疑念に的確に注意を向けてきた。彼自身

と女性があらゆるものを支配下に置くほど卓越していることについて語気を強くはしているが、ダンには短気にもこの世の他の人びとが仕事に取り組んでいるのを意識しているように思える。実際の宮廷や実際の王がしているかもしれないことが、ダンの精神の背後に残っている。そしてこれを中和するかのようにその詩は個人的な王権の支配をダンが事実上いかに熱烈に「せっかちに」働きたいと思つていたかを思い起こさせる。窓の内側の蜘蛛のように職が無くていかに無用と感じていたことか、この世や宮廷に受け入れられることがどんなに重要であると思つたことか。詩の最初の言葉は、嘲りと同時に嫉妬と恨みが込められている。

ダンが誇示している言葉は、あらゆる誇示の言葉のように、自信の無さの表れであり、このことで詩はもつと人間くさくなる。声を出している王権への主張は帰するところ、個人的に無いものねだりをしていくことになる。ありきたりで私的な二人の愛が最高に重要であるかもしれないことは、私たちが理解するようにダンには確実すぎて危険を犯せない主張である。そのことを系統立てて述べようとすると、自分自身が王たちとの比較を喚起していることに気づき、こうすることは、慣習的価値観の尺度を受け入れることになる。その頂点にいる王たちを彼はひっくり返そうとしているように見えるけれど。もしも恋人たちが王たちと呼ばれることでのみ最高のものになるとしてもその時、王たちは最高のままである。私的な世界は公的なものを真似するときのみ価値がでる。

ダンが聖職に就いたとき、詩の中ではその昇進によって自分が王とか王を越えたものになったのだという振りをして見せる必要を再び感じた。「聖職就任後のテイルマン氏へ」という詩は、新しく聖職を授けられた牧師に彼の輝きとダンのものである天職について告げる。

神や運命の大使ほどに

そんな高貴などんな職業があるだろうか？

王たちが威厳を与える以上に

生命を解放し、王国を与えるためだろうか、？⁽³⁹⁾

これを読むと思ひ起こすのは、ダンが実際になりたかつたのがヴェニス大使であつて、神とか運命の大使ではないということである。その詩行の自己顕示欲は、慰めの形である。自分自身とテイルマン氏を注目するようにする際、ダンがそうすべきだと、思つた最高のことは、自分たちを王や授けられる肩書き以上に置くことである。そのことは、たとえ王たちが授ける名誉などを追い求めることで働く生活の大部分を費やしてしまったことを知らないとしても、ダンがいかに王室に心を奪われていたかを示せば、十分であろう。

「テイルマン氏へ」の熱心な勧めと比較してみると、『日の出』の中の王権への提案は、無防備のように響き、だからこそもつと躍動している。注目すべきは、ダンが太陽に命令したいことについて、その詩の途中で、気持ちを変えていることである。太陽に向かつてあつちに行くと、命ずることで始まるが、最後には自分と恋人のところに留まって自分たちを暖めてくれと言つている。そう言うまで二人が暖めて欲しいなどとは思ひもよらなかつたし、その考えは感動的である。ダンが太陽に向かつて言う退去（「行け」）から招待（「ここをほくらを照らすがいい」）への移り変わりは様式の変化を伴う。出だしの不機嫌さが懷疑的な調子（お前の歳では楽しみたいだろう）に取つてかわる。話者は全く恋人と二人つきりにして欲しいと思つていないように見える。なお二人が十分に卓越していることを話者は感じていない。二人だけに太陽が照つて欲しいと願つて

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

いる。詩の流れの中のこのような変化は、その詩を全くの空威張り
に安住させない。生きているものの変わり易さがある。

この中で、そしてその不安の中で、その詩は、ダンの一連の偉大
な詩の中の別の詩に似ている。しかし、『日の出』の恋人が寒さの
中に置き去りにされることを心配する一方、『一周年記念』の恋人
は迫り来る闇に自分自身を対抗させる。

全ての王と全ての寵臣たち

名誉や美や機知に輝く全ての人たちが

過ぎゆく時間を作り出す太陽自身が

いまでは一年歳をとり、あるときは

きみとぼくが初めて会ったときだった。

他のものは全て破滅へと近づくと、

ぼくらの愛だけは衰えない。

愛には明日もなく、また昨日もない

流れながらもぼくらから流れ去らずに

最初で最後のかつ永遠の日を真実に留めてくれる。

二つの墓がきみとぼくの屍を隠すだろうが

もし一つなら死は離別ではない。

ああ、他の王たちと同じようにぼくらも

(お互いに充分王なのだから)

ついに死に、これらの眼や耳から別れねばならない
時として真実の誓いや優しく塩辛い涙を受けながら。

しかし魂に住むのが愛だけなら

(他の思いがみな仮住まいなら) 愛は衰えぬばかりか

天国へ昇ってもっと強くなる、
肉体が墓へと運ばれ、魂が墓から抜け出るときに。

そのときこそぼくらは全き祝福を受ける

ぼくらも他の人もみな平等に

しかしこの地上でぼくらは王、ぼくらの他に

これほどの王、これほどの臣下を持つ王はいないはず

この上なくぼくらは安全だ、裏切りそうな臣下は

ぼくら二人の内の一人しかないのだから

真偽を問わず危惧は持つまい

王に相應しく愛して生きて、そして

歳月に歳月を重ねて行こう。やがて

六十周年記念の詩も書けようと、今日からぼくらの治世の二
年目だ。⁽⁴⁰⁾

その詩の最初の三行は、王たちや誉れある人たちと太陽とを絡め
ることで主権への華やかなトランペットの音色のように響く。しか
し、葬送歌なのである。豪華な閃光は暗くなり、詩人の個人的な主
張は明らかに最初に集められた死にゆく輝かしい者たちから出発し
ている。第一連が先に大きく歩きだすのは帝国の破壊や太陽の働き
を越えているからである。

この大胆な出だしにも関わらず、心配は『日の出』の中よりもつ
とここまでは深刻になっており、その詩が持つ無遠慮さや冷やかしさ
影を潜めている。自信は第一連の後で凹んでしまう。第二連が始ま
るや、私たちはさらに関わりのある複雑な声が支配していること
とを指摘できるし、この声が声自体とその女性とを説き伏せて事柄

に（「王に相応しく愛し合おう」）勇敢な仮面をつけようとするが、このような勇氣は自己欺瞞の形態であることが認められる。いくら断固として恐れについて考えるのを「抑え」ようとしても、偽物と本物の恐怖は存在する。最後の詩行の六十代の恋人たちの幻はよくよく考えるとあまり慰めをもたらさしめない。

王権への主張もまた『日の出』と比べると自信がない。「彼女は全ての世界、全ての王はぼく」という事実を投げつけられる代わりに、その主張は、特別な嘆願の一つとしてその詩の中に押しやられるが一方ダンは死に関してその女性を慰める。結局、ダンがその女性をなだめて信じさせるように二人は「お互いに充分王」なのではないのか。あの修飾語「充分」がその虚偽を裏切る。すなわち、二人とも本当の王ではない。第三連はより高い調子（ぼくたちのほかに／これほどの王はいないはず）をとるけれど、その効果は大げさな熱弁でそれを助ける必要があつて弱まっている（この上なくぼくらは安全だ）。

しかし、その詩が持つ自信が侵されてしまっている事實は、最高であると感じたい欲求が衰えていることではない。全く反対である。死について考えることは不安を抱かせるが、よく見なければならぬように、死が恋人たちを引き裂くとか、二人の愛を壊すとか、二人の幸福を減少させるからではない。ダンが自分自身を説得させるように、これらの事柄はどれも起こらない。死が二人の最高であることを終わらせてしまうから不安を抱かせるのである。死んでしまふことで、「全き祝福をうけて」二人は全く幸福であるが「他の人もみな」幸福であり、そんなことは耐え難い。ダンが切望しているのは、幸福ではなく、優越なのである。それはダンの詩から死後の生活を追い立てるか、またダンの王の優越性に戻っているかの理

由なのである（「この地上でぼくらは王」）。ダンは二人の支配が一时的にすぎないことを知っている。時の融合は、最後の詩行が私たちに示すように、すでに燃えているのである。しかし、それにも関わらず、ダンは二人の地上での支配にしがみついている。それはその詩の中の重大な方向転換を提示する。なぜなら、最初にそれはダンが祝した二人の肉体を離れた愛であつた。明日も知らぬ時をこえて、今やそれは何年も考慮された二人の王国である。

もちろん、ダンは自分と女性が死んだ後も王であり続けるなどと思つていなかったからこそ、単純な詩を書くことができなかつたのである。だから、天上での祝福か、それとも王としての優位かということを選ぶ必要は避けられなかつた。何世紀にも渡つて、他の作家たちは幻想の世界か、あるいは真面目な世界でこの段階をとつてきた。シェイクスピアが描くアントニーは自分自身とクレオパトラのために王としての死後の生活を見る。

魂が花々の上に休んでいる天国で、おれたちは手に手を取つて陽気に振舞い、亡霊たちを驚かせよう、ガイドーとイーニアスもお供の亡霊たちをおれたちに奪われることになる。⁽⁴¹⁾

D・H・ロレンスの描く自然の貴族も同様にその優れた生命力の力で下層社会で最高であることを想像する傾向にある。「私が死ぬとき黄泉の国で王様になるだろう」とダイオニス伯爵は『レディーバード』⁽⁴²⁾の中の妖精ダブネーに「そしておまえは私の味方になるであろう」と自信を与える。ダンはときどき天国には階級や等級があるかもしれないと信じようとしていた。「天国の聖者たちの中に栄光の階級があることをほとんど誰も否定しなかつた」とダンは一六

二六年の説教の中で述べた。「天国は王国であり、キリストが王である。そして、世間一般の考えはその国家や君主制と合わない。」⁽⁴³⁾ダンがいつもそんなに確信を持っているとは限らなかった。三年過ぎたばかりの別の説教でダンは違った見方をしている。「人は全て同じように蘇るであろう、⁽⁴⁴⁾、栄光の座に蘇る者全ては等しく王になるであろう。」しかし、この人類平等主義の教義でさえ、ダンが『一周年記念』の中の恋人たちを天国にいる王とすることを許したであろう。なぜなら、ダンは二人が祝福されたものの間にいることになると、簡潔に述べるからである。しかし、ダンはそのようには描かなかった。ダンは詩の構想をし、そのために詩が誇る王権の優位性と同時にその弱さを露呈することになった。ダンは愛の王たちを用いて、死から王位を剝奪することに対抗したので、その詩的確かさは、疑いで、その詩の野心は、心配事で和らげられることになった。

この二つの詩の中でダンが強く自分自身の主権とか、自分の愛を主張するのは疑惑があつてのことであるのは紛れもない事実である。ダンは主権のことを考えると非常に心が高揚した。リベラルな見方をする読者にはこれが汚点のように見えるかもしれない。ダンが自分の愛と王権は同じであることは反論する読者がいるかもしれないのである。詩の中の女性は世界（「全ての世界」）になることができるが、彼女は実のところ略奪され利用されたまま、所有され支配された世界である。彼女は「胡椒と金銀の出る東西二つのインド」である。リベラルな読者なら自然とダンが持っている偉大なものへ追従する姿や熱烈な王室好きを簡単に片づけてしまっているだろう。単なる日和見主義と貪欲さに過ぎないと考えられるかもしれない。しかしながら、ダンの精神のこの部分を正確に理解する

ためには私たちが認識しなければならないことがある。宮廷やそこに住む大公たちに対する尊敬が、ダンの信仰にあまりにも深く根を張っていたので信仰の一部になっていたのである。私たちがルネサンスを一つの時代だと考え、そこで宮廷の栄光や地上の神のごとき王の栄光がその最高潮に達していたのだとすれば、少なくともこの点でダンはルネサンス期の人物であつたと言つてよい。

ダンの説教集から、普通よりも厳しい信仰の伝統の中で育った人には驚きとなるこの世の華やかさにダンが結びつけた宗教的な価値の証言を私たちは推論することができる。「王たちが神々であるように、彼らが上手に支配する宮廷は天国の写しであり、代理であり、地上の王たちは天上の王との公平で栄光に満ちた似姿である。すなわち、王たちがあの太陽の光線、あの松明の炎であり、神々のようであり、神々そのものである」とダンは断言する。王たちのいる宮廷の中であるのは、そこでキリストと「私たちの魂を救わなくてはならないこの知恵」が「栄光に富み、群を抜いて見つけられることになるのである」⁽⁴⁵⁾。聖霊が聖書の中で言葉を洗練されると、ダンが「良き宮廷人」であることが分かる。

ダンの意見はもちろん神聖な王権によって支配されると主張するジェームズ一世と密接に符号する。王室の神聖な輝きによって、ダンが強調するように即座の服従と声無き民主主義的不平をつぶやくべきである。太陽のように王は神の燃え立つ顔なのだから。「私たちを太陽を通して見下ろすとき、神はいかに栄光に溢れているか。神が持つあの鏡の中でいかに栄光に溢れているか。神はいかに栄光に溢れているか、王を通して私たちの間で見渡すとき、神が持つあのイメージの中でいかに神は栄光に溢れていることか」⁽⁴⁶⁾。王が単に人々が持つ意見によって、支配していることを論ずることは、神の権

威を傷つけることであるとダンが警告する。なぜなら、王を非難する個人は正義であろうとも、不敬罪にあたるからである。私たちは教会や国家が権力の行使をすることを批評する権利はない。たとえ間違わなくその権利が存在するところであつても⁽⁴⁷⁾。

もし政府の役人たちについて悪く考えたり、彼らに従わないことになれば、私たちの魂を危険に晒すことになる。「我々は力の源である父なる神に対して罪を犯す。市民治安判事が持つ権限を間違つて理解してしまうことがある」⁽⁴⁸⁾。

ダンは教会やその聖職者たちへのこの服従の義務を少しも免除しない。個人が個別の霊的な生活をする中で市民治安判事が干渉することはいつも非国教徒の意識に呪いとなつてしまつていて、なおかつミルトンを奮起させることになるのだが、ダンには全く適切なように思えた。教会人としてダンはあらゆる教派、分離主義者や分離を嫌つたし、彼らの中傷する機会を決して逃すことはなかった。彼らはキリスト教信仰の栄光ある統一を粉碎しようとしているだけであり、法律で鎮圧すべきであると考へた。神は私たちの信仰を「裁判官の手の中に」置き給うた、とダンは自分の会衆に思い起こさせた。正しいのは刑の立法措置で強制的に私たちが洗礼を受けた教会に留まることであり、その教会の習慣に従うことである。聖ポール⁽⁴⁹⁾大聖堂の主任牧師のとき、自分の教会員の一人が訓戒を受けたが、その時、跪くのを拒んでニューゲイト監獄に投獄されたことがあつた。その信者のように教会は、王の前で謙虚でいなければならぬ、とダンは主張した。聖職者たちが自分たちの意識に従つて、王の前で大胆に語ろうと考へることは旧約の予言者たちがしたように「思い通りにならず、事ごとに反対し、危険に晒されながら」生きることになる。⁽⁵⁰⁾

裁判所の崇高さに敬意を払うことは、王に従うのと同じように、ダンの精神の中ではキリスト教礼拝と密接な関係がある。宮廷人がまとう華麗で、飾りたてた服装は、私たちが推測するように、許容範囲というだけではなく、宗教儀式の一要素でもある。「神は聖書の中で、栄光に満たされ自らを着飾ると言われている」とダンは指摘し、神は「宮廷の中の聖職者の中にあつて絹や柔らかい衣類の良質の衣服を着ている」⁽⁵¹⁾。だから宮廷人たちが自らを高価な繊維で包むとき、実際に神の栄光を高めているのである。彼らが富、名譽、地位、それに素晴らしい生活の仕方を望むことが、ダンの判断によると、同時に優れたキリスト者だということになる。ダンが思い出させるように、聖霊は金持ちの暗喩を通して神と天をほのめかす。永遠の生命は聖書の中でこの豊富な言葉で描かれているから、それを確かめる方法は地上で豊富であることによるのである。「だから、愛する者よ、救いそれ自体は栄光と喜びの名の下に私たちにとても頻繁に示されているとしても、我々はその栄光への道がこの世で影響を受けた汚れた生活であるなどと考へることはできない。この世での昇進や金持ちや尊敬のあらゆる道を漠然と乞うように無視して捨てることではない」⁽⁵²⁾。富を勝ち得ようとすることは完全に「真実で天上の知恵」と矛盾しないことをダンは強調する。ダンがキリスト教について言っていることは、全くキリストの言葉に似ているように思われないと反論する人々に対して、ダン自身は答えを持っている。「キリスト教徒一人一人がキリストではない」と。確かにキリストは一般の罪人たちと一緒にいたが、もし私たちがそうすることになれば、彼らの仲間が私たちに影響を与えるかもしれないと論ずる。キリストを模倣することは、行き過ぎの行為である。ダンは会衆に向かつてそのことを警告する。「なぜなら、やり過ぎることがいつも善とは

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

限らないからである。⁵⁶⁾

ダンの説教壇から流れ出る王や宮廷への追従は、ひたむきな立身出世主義者の戦略として皮肉屋が解釈したと取ることもできる。しかし、それではあまりにも単純過ぎる説明に思える。私たちが見てきたように、ダンの詩は、人に見せるために書かれたものではなかったけれど、王権の魔力にやすやすと取り付かれていて、詩自体でそれに異議を申し立てている。王室がダンの意識の深みで光を放っていた。自分を王だと考えることは、ダンが空想する最終点だった。ダンには愛によって高められた自分自身の精神力が及ぶ領域を観察するとき、それ自体を提示する地上の王たちの暗喩である。『エクスタシー』の中でダンが女性に言う。「純粋な恋人たちの魂は」肉体のない不能に留まっていることを禁じられる、しかし

降りてゆかねばならない

親愛の情や諸々の機関へ向かって

感覚の手の届くその範囲内へ、

さもなければ独房に繋がれた王も同じ。⁵⁷⁾

私たちの時代で、国王が監禁さるという考えは、そんなに大きな畏怖の念は誘発しはしない。しかし、ダンにとつて、そのイメージは明らかに途方もなく不可思議な正反対のものを表現していた。すなわち、閉じこめられた神のごときもの、捕虜になった太陽である。美少年に弱く、悪名高いほどに清潔感覚が低いあの好色で夜な夜な出歩くジェームズ一世を神とか、太陽であると考えること自体、ダンの側から言わせれば、着想的に超越しているほどの思い切った努力が必要だったにちがいない。しかし、そのときあらゆる人間の高邁な目的は、極端に走るなら、それを必要とするのである。堅い決心の

もとに自己を欺くことは、どんな絶対主義者も持たなければならぬ第一条件である。英国国教会に改宗しないままジェームズ一世に忠誠を誓ったとき、ダンには自分には想像することが必要であると言った。ダンが考える政治は、自分の魂から出たものである。ダンが説教集の中で燦然と輝く、力溢れる王を作り出したのは、とりもなおさず『熱病』の中の女性を世界の魂にしたり、エリザベス・ドウルリーを聖なる者としてたり、自分や恋人を国や王に変えたりした同じ彼の精神を満足させるためであった。絶対的なものへ向かう気持ちは、絶えずダンを駆り立て続けた。

ミルトンとの対比で私たちはすでに言及しているが、この点に関して特に明確である。ミルトンの精神は、慣習的に織りなす現実を相反する要素に分けるのである。すなわち、『ラレグロ』は『イルパンセロン』で答えられる。コーマスはレイディに直面する。サタンは神と戦う。同じくダンも、それほどではないとしても、自分自身の中の分裂に気づいていて、そのような分裂を切り抜け、統一する一つの全体に向かって希望を抱いていた。著しく異なった宗教的・政治的見方は二人の詩人の間の基本的反感から生まれている。三位一体の教義は、融合して分裂した要素を超越した合一へと結びつけようとするものであるが、ダンが夢中になって褒め称えたけれども、ミルトンは拒否した。ミルトンは父、子、聖霊は本質的に異なったままではなければならないと主張した。⁵⁸⁾ ミルトンは離婚を擁護した。ダンも詩の中で魂の融合を力説し、説教集の中では結婚の神秘的結合を力説した。宗派や分離主義はキリストの教会をばらばらにするが、ミルトンは『アレオパギティカ』の中で健全な不一致の現れとして弁護し、同じ理由で政府の検閲に反対した。それが相反する意見を封じ込めることになるからである。しかし、ダンも私たちが見

るように、不一致を公然と罵り、検閲を支持した。ジェームズ一世が一六二二年『説教者の手引き』を出版し、話題となつてゐる宗教的、政治的問題を公に議論することを禁止したとき、ダンは選ばれ、聖ポール・クロス教会でこの鎮圧の法案を正当化する説教をした。ジェームズ一世はその結果にとても満足して緊急に印刷に付した。⁵⁹

王権について、ミルトンとダンは当然のことながら真つ向から対立した。ミルトンはチャールズ一世が処刑されたことについて公に弁護する文書を書き、王は臣民の承認を得て統治し、臣民は不正な王が十分に償いをするように求める権利がある、と論じた。絶体主義者ダンは神聖な主権のイメージに突き動かされ、太陽が雲を追い払うように反対を追い散らすのであると説明した。

ダンにとつて、この王権を理論化する魅力は、単にきらびやかさだけにはなく、一人の人間に注ぎ込まれるその限りなき権力にあるのである。権力を行使することはダンを魅了し、ダンの技法の中で重要な要素である。『寝に來る恋人へ』のような詩が病的といつてもよい横柄な態度は十分に明確である。しかし、若い頃の恋愛詩はおしなべて叙情的で敬う心がある時でも、表現力を行使してみたい衝動を詩の中に見ることができると。例として私たちは『恋人に』というエレジーを取り上げる。ダンは外国に出掛けようとしていて、熱心に恋人を説得して小姓として変装してついで行くという計画を諦めさせ、家において二人の愛を秘密にしておいてくれと頼む。

ぼくが出掛けたら、ぼくのことを夢見て、幸福になつてくれ
きみの表情にぼくらの長く隠していた愛を悟らせないように
ぼくを誉めたり、貶めたりしないように、また大つぴらに
愛の力を祝福したり、呪つたりしないように。またベッドで

真夜中に飛び起き、叫んで、きみの乳母を驚かせないでくれ
ああ、ばあや、わたしの愛しい人が殺されるわ。見たのよ。
一人で雪のアルプスを越えて行くのを。見たのよ、わたし。
襲われ、戦い、負けて、刺され、血を流し、倒れて死ぬのを。⁶⁰

不気味で恐ろしい光は、その夢から、その女性の驚いた姿を越えてそれ自体を発光しているように思えるが、ただ人目を引くというのではなく、劇的に想像してみた成果なのである。ダンは別の人物を持つ潜在意識に入り込む。『寝に來る恋人に』の中で女性は精神を持っていない。ただ肉体とそこから取り除く衣服があるだけである。しかし、『恋人に』はもつと同情的な詩であるが、ダンの權威を全く強固に表している。詩は全体的に教訓に満ちている。ダンは結末を予測し、危険を計算し、女性の行為の一つを選びもう一つを禁止する。その男性と比べて、女性は子供である。それは乳母が出てくることで生まれる印象である。彼女もその詩が模倣するように彼に対する愛から離れそうになっている。そこで彼は彼女の夢を見だし、彼女は自分が立てた馬鹿げた駆け落ちの計画に対する警告を受けなければならぬ。このように『寝に來る恋人に』のような報復を歌う詩ではないけれど、その詩は大きく見せるようにダンの表現力をその女性の思いや行いに及ぼすようにしている。

表現力はダンの詩の中で具体化する原理である。表現力そのものをどのように伝えるかと言うと、ダンの採用する独裁的態度を通してだったり、情け容赦のない議論を吹き掛けるやり方を通してだったり、イメージの中で意識化された世界の対象を巧妙に扱つたり乱暴に組み合わせたりすることを通してだったりする。読者は詩の背後に集められているプレッシャーを感じて、詩を理解しようと詩の

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

扱いにくい材料を料理する。コールリッジはダンについて自分が歌った詩の中でこの一般的な反応を声に出す。

ダンと、思想は一瘤駱駝に乗って早足だ、

鉄の火掻き棒を輪にして、真の愛の結び目を作れ。

押韻は不屈の足萎え、着想は驚きと道筋、

機知は塊鉄炉と炉火噴射、意味は圧縮とひねり。⁽⁶¹⁾

ダンは工業機械の一部のようにここで描かれていて、情け容赦なく威圧的である。

表現力は、ダンが定義するように「力強く人を説得する力」⁽⁶²⁾と同じであり、同様にダンの統語法とリズムの中に組み込まれていて、その声は言葉を這い上がる。精力的に読み進めて行く必要があるから、倒置や不意の発声によって、詩行の流れが壊れる。これらの効果は、すでに『一周年記念』から引用した詩行で容易に示すことができる。

しかし愛の他、何も住まない二人の魂は、

(他の思いは全て同居人なのだが) その時、

この天上で高められた愛を示すことになるだろう、

まるで熱心に論ずるのに十分な余地が無いみたいに、二行目の不意の発声や三行目の限定を加えることで、その流れを窮屈な雰囲気にしていく。詩の形は、間違った長さに見えるように作られている。ダンは自ら選んだ韻律に乗りうとせずに、征服しようとする。優雅さが初期の犠牲になっているが、それで私たちはその全ての困難な

企ての背後で解決することをさらに強く確信するだけである。

命令形と疑問形を使うことで、同じように詩は分断され、詩に理解力と主張を与えることになる。『ソングズ・アンド・ソネツ』の大部分は、命令形か、疑問形か、あるいは最上級で始まる。どれも証拠立てが必要とされ、それでしばしば論争される。その結果、努力してよく考えることになる。その詩は普通よりもっと激烈で、さらに激しく表現され、計算してみると英語の詩の平均であるよりも大雑把に言って十行にさらに二つの動詞が多く含まれている。六行と十二行の間にはさらに多くの連結語⁽⁶³⁾がある。それらの詩は叙述的、すなわち物語詩が陥るような直接話法に飛び込むことは許されない。その代わり、ダンの詩は一人芝居に似ていて、そこでダンが描く人物は甘言をろうし、要求し、明確に述べながら、その最前面のかなりの部分を占めるのである。それを私たちは、その人物の肩越しや腕の下から、その言葉の流れが向けられているある無名の人物をちらっと時たま見るだけである。

その表現力の印象は、作家としてのダンが宇宙を把握する方法によって高められる。ダンの詩や同じく散文作品の中でも、人間が、景観を越えて聳えている。ダンには抜群の精神力の持ち主である。直感的な状況把握は、軌跡の特色を持っているが、私たちがダンの言うことに耳を傾けるときには取るに足りないものに縮んでしまう。ダンは地球を地図や地球儀と見て、天球が宇宙を通してその回りを飛んでいるのを観察する。卓越しているから、山の連峰や海の深さを測ることができる。ダンはテネリフ山が『第一周年詩』の中で飛び抜けているのを見る。

一つの岩のごとく、人は考えるかもしれない
浮いている月がそこで座礁して、沈んでしまおうと。

ダンはその同じ詩の中で大海の底を隠す暗い水の深さを通じてじつと見下ろす。一時間ごとに水の深さを通して運の尽きた生き物が沈んで行くのを想像する。

海はとても深いので、鯨が今日、あるいは明日、
銚を打ち込まれて
鯨が望む旅路の終わりの途中、海底で死ぬ。

ダンが地球の表面に水が動くのに気づき、『三重の馬鹿』の中で言うように、その方法に注目する。

地球の内側の狭く曲がった水路が
海水の苦い塩分を濾過するように。⁶⁶

ダンが話すその高さから、河の成り立ちは波状の小道のように見える。テニソンの『鷹』を思い起こさせる。

かれは曲がった両の手でごつごつした岩を握む。
寂しい土地で太陽に近く、

しかし、テニソンの中でその詩が持つ全体の要点が驚の並外れた高さである。ダンは河を縮めて狭く、ついでみたいに曲がりくねった通路にしてしまう。巨大な視点は、当然と思うことが多いので、

その詩は私たちが空中に持ち上げたり、私たちの地下の世界を広げたりして初めて何が起こっているのかを知ることになる。

ダンの想像力の大きさは宇宙的である。何重にも分かれた空は、よく知っている領域である。ダンは空が交差し、分割されているのを宇宙地理学者の表のように見る。

子午線と平行線の

人間は網を編んできて、この網が
天に投げられ、今や天は人間のもの。⁶⁷

太陽は、他の詩人たちにそう思われているほどに、エネルギーの源とかこの世に滋養を与える聖なる力としてはイメージされない。ダンの中でそれは基本的にはロケットであり、軌道と時刻表を備えた地球の衛星である。太陽に言及するとき、地球の回りの軌道はダンが注目するものである。太陽が頭の上を輝いているのではなく、宇宙という金魚鉢の中を泳いでいると考えている。なぜなら、この優位に立つ立場を楽しむから、太陽を同等のもの、あるいは従属するものとして述べることができる。「眠れ、眠れ、年老いた太陽よ」⁶⁸太陽に命令を下し、瞬き一つで三日月にしてしまうぞと脅したりする。『神学論集』の中で地球の突起や内側の窪地を横目で見る。まるでX線の眼を持った宇宙飛行士が優位な観点から見ているようである。

丘は、流星の国を越えて、その頂上をそれぞれに突き出しているが、その麓を一つの国に下ろして、その影を別の国に投げかけている。国という顔に出たいほにすぎない。そ

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

の地下や洞窟、風の寝床、秘密の通りや川の一つ一つの通り道は、たくさんの皺や痘痕の穴に過ぎない。⁶⁹⁾

宇宙に出て、ダンは山々をいぼと見ることができ、また山々の影が全ての国々を横切つて落ちて見ることができ、縮小しているけれど、世界は現に確固としてある。

ダンの詩に関しては、この足場を成層圏に持つことの効果は、抜群である。それによって、詩の基本的な計画が再構築され、盛り込まれているものと同じくらい表現されるものが影響を受けて、その結果、私たちはそうでなければダンの詩がどのように存在しえたのかを指摘する必要がある。それからやつとダンの詩がその主題の扱い方と同じようにいかに風変わりであるかを見ることができ、このことを展開するのに役立つ詩が『受苦日』、一六一三年、馬に乗って西方へ』である。なぜなら、その作詩した状況についてかなりの部分を知っているからである。一六一三年にはダンはポールスワースに滞在していたが、そこはアーデンの森にある友人ヘンリー・グッドイヤー卿の別荘だった。私たちはポールスワースがどんなところか詩から想像することができる。その詩は丁度ダンがそこを訪問したとき、ダンとグッドイヤーが共同で書いたものであり、一人ずつ交互の連を作った。グッドイヤーはここでイタリック体で書いている。二人の名無しの夫人宛に書いたが、ポールスワースの田園の春の輝きと夫人たちとを比較している。

木のどれもが今花を咲かせ始めるので

香りを発し色彩が豊かになって一つひとつが頭を垂れる

雄鹿は果物が実ると同じように、

私たちは甘美な花を一つも考えず、
ただ、吐き出すあなた方の息と出会う。
そしてあなた方の真実の姿として、遜って挨拶を交す。

私たちがみるヒバリの声を聞いてごらん下さい。私たちはあなた方が歌うのを聞き、一年中を春にしようの誰が秋が来る恐れから私たちを救いだし、刺激してくれるのは

アンカー川の中で風いだ水面にあなた方の滑らかさを見る、
あなた方の心は混ぜ合わされず、純潔にしている
海が最初の処女性を触れさせないでいるように⁷⁰⁾

このことから私たちはポールスワースが持つ月並みの詩的利点が何であったのかを知ることができる。すなわち、咲き乱れる木々、花の香り、ヒバリ、アンカー川、その汚れの無い水の流れをグッドイヤーは引用した最後の連で称賛する。エリザベス朝詩人マイケル・ドレイトンはポールスワースに住んでいて、アンカー川の美しさを称えるソネットを数編書いた。一六一三年のダンの訪問は4月2日に終った。そのとき、彼は馬に乗って、モントゴメリー城まで行った。城はもう一人の友人エドワード・ハーバートの従兄弟フィリップのものだった。途中、彼は『受苦日』、一六一三年馬で西へ』を書いた。一つのは原稿ではその詩は『受苦日』、私は馬に乗って西へ向かう時に作りし、その日』と題が付けられている。それはダン自身が付けた詩の見出しのように思える。そのとき、後でそれを書き写している。もう一つのは原稿によると、その詩は完成されていて、ダンが旅を終えないうちに、グッドイヤーに点検のために送付されたの

が分かる。J・ダン氏はH・G・卿のところから帰る途中、受苦日にこの瞑想を送り返した」と原稿は述べている。だから、ワーズワスの『ティンターン寺院』のように移動中に作られた詩であった。

しかし、他のあらゆる点で、『ティンターン寺院』に似ていることになる。モントゴメリーはポールスワースの西、約65マイルに位置する。その方に向かつて馬に乗りダンは英国の島の最も詩的で、有名になった風景の一つにもなったものを横切った。A・E・ハウスマンが書いた『シュロプシャーの若者』の風景。ウエンロック・エッジは、ハウスマンが苦悩してその森を見たところであるが、ダンが通った道の南方へ半分位に行ったところである。しかし、私たちがダンの詩を読むと、馬で通った田園に気づいても、月の表面の旅を続けているかのように感じていたのが分かる。彼の心は惑星の間にあつて、その軌道が運行するのに不規則であると考えていた。

人間の魂を天球にしてください。それからこの中で、知性が働き、祈りとなる。

他の天球は、全く異なった運行へ従属して成長することで、自らの運行を失い、

そして、他の天球によって、毎日せかされ、一年の中でその天球の自然の形体に従わないように、私たちの魂は、遊びか、仕事を

そのように最初に動かすもののために認め、それによって、動かされる。

それゆえに、私は、この日、西へと馬で運ばれて、そのとき、私の魂の形状は東へと曲げられる。そこで私は昇って沈む太陽を見ることになる。

また、沈んでいくことで終わりのない日を生じる。

しかしこの十字架上のあのキリストは復活し倒れた。罪が永遠に全ての人々を闇に包んでいた。

だがあえて私は喜んでいと言つてもよい。私にとつてあまりに重すぎるあの光景を見はしない、

両極を計るあのキリストの両の手を見て、そしてただちにあの傷穴に差し込まれた全ての天球に合わせる事ができるのか、

このことは私が馬に乗りながら、私の目に見えたけれどこれらのことは、今もなお私の記憶にある。

なぜなら、記憶は諸々のことに傾いているからである。

救い主よ、あなたは木に吊るされながら、あなたは私の方に向いておられる⁽¹⁾

ウォリックシャー州とシュロップシャー州は川、鳥、木々、それにかんりの人口があるのに、跡形も無くなっている。それに関する限りでは、ダンは馬を所有している。それは、ダンが横切る地上の領域では全くない。詩で描かれる地図は、現実離れしている。ダンは惑星のように巨大な十字架から動き去り、風景はただの地形、それをあえて見ようとはせず、そこに自分を見ているキリストが十字架にかかっている。二つの州の至る所でダンとキリストだけが登場人場である。

この巨大に宇宙を捕らえることは、ダンの詩の中を通して広がる。彼の目は海に対する避難所である。ただ、ダンがすでに嘆き悲しんでいるので、私たちが昔から見てきた地球の海ではなく、銀河系の

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

間にある前人未踏の世界にある海である。

その天を越え、最も高きにいたもうあなたは
新しい天球を見つけ、新大陸について書くことができます
私の目の中に新しい海をください、私は涙で
私の世界を溺死させるかもしれませんから。⁽⁷²⁾

ダンの愛に関する限り、地震の変動は愛を考えるのに十分な大きさではない。愛の動揺は宇宙空間の震えに似ているし、宇宙の枠組みのねじれはあまりにもわずかで、そのショックの波は地球の表面のサラサラいう音にもならない。

地球が動くことで被害と恐れをもたらす
人間は何が起こり、どんな意味があったのかを判断する
しかし天球の震動は
かなり遠いとしても、無垢である⁽⁷³⁾

男が愛を捧げる女性は、宇宙の力である。彼女の引力は潮の満ち引きを支配する。

ああ、月よりもさらに強い女よ、
海を引っ張ってあなたの天球でぼくを溺れさせないでくれ。⁽⁷⁴⁾

二人が涙を流すと地球を飲み込む。二人の愛が冷めると自然は創造以前の大混乱に戻ってしまう。

時には洪水は

ぼくら二人の涙でできるのだ。だから
全世界をぼくら二人は溺れさせた。時にはぼくらが
二つの混沌になってしまったのは、何か他のことに関心を
持ったとき。⁽⁷⁵⁾

詩で描かれる地形は、詩の持つ他の力強い特徴と相まって、結実した英国ルネサンスを表現するために詩を最も永続性のある意志の表われとしている。

たぶん、例外は説教集であろう。なぜなら、ダンが英国国教会に入ったとき、神の中にそれも神の言葉を伝える者としての立場の中で最終的で十分な表現力を見出した。もしもダンが最も一貫して説教の中で尊敬するのはどのように積極的な資質なのかと問えば、美とか、人生とか、愛という答えではなく、ただ表現力である。ダンが描く神は燃え立って全開している発電所である。神はエネルギーの爆発である。目は太陽よりも熱く、人々を溶かす。一息で国を爆破することもできるし、一振りで世界を崩壊させることもできる。

声たるや想像を越えた大きさである。神が子供たちを殺すのは、表現された「罪に汚れた放蕩」のゆえにその親たちを罰するためなのである。背中や首を折る。人間を破壊する無限の恐怖に溢れた方法を持つている。神の掟は、戒厳令である。パン屑で窒息させることもできれば、隣の木に吊るすこともできる。舞台に投げ込んで、そこに役者、そこにベッドでも恋人でも、ただちに地球から地獄へと投げ込むことができる。神は「一夜にしてセンナケリブ軍の中にいる二十万人のアッシリアン人」を殺害した。人間を天からの大きな石で連打し、闇雲にすべての主人を撃ち殺し、馬と炎の戦車とで山

々を満たすことで知られている。地震、疫病、「流れ出る悪臭」は神の手中にある。換言すれば、聖なる、皆殺しの恐怖であり、それは人間を拷問にかけるのに選ぶ道具の持つ果てしない巧妙さがある。「もし主がお怒りになるなら、軍隊を呼ぶラッパなどはいらないし、もし蠅や蜂を追い払うためにしっしつと言ったりして、排斥するだけなら、神の御手を使うほどのことは何も無い。それは、あなたを不愉快にさせることも、当惑させることも、あなたの魂の活力を溶かしたり、力を無くしたり、弱めたり、消滅させたりすることもできないようなことだからである」⁽⁷⁶⁾。

神の愛と慈悲は、ダンの中では二の次ぎなのである。ダンの表現力は基本であり、本質である。「それは表現力に尽きる」とダンは説明する。それによって、神の別の属性を表現するのである。すなわち「全てをするのが表現力である」⁽⁷⁷⁾。星で天空を飾ってきたように、「神は名前や隠喩や表現力の明示的意味を含む聖書を持っている」⁽⁷⁸⁾。

さらに読者が今のところ推測しているように、神の破壊力こそがダンを捕らえて離さないものなのである。もちろん、ダンが考える神は破壊者であると同時に創造者である。しかし、創造の理論は、考え方としてダンを魅了したけれど、自分の着想を決して固定することなく、作品化した。『失楽園』の第七巻の創造についてのミルトンの魅力的で独創的な記述と直ちに比べることができる文章はダンの作品の中には何処にもない。ダンが描いているのは、抹殺者としての神である。「悪の全ては神が創り給いし世界で起こる」とダンは会衆に思い起こさせる。疫病、戦争、飢饉などあらゆるものは神から出たのである。聖者の中の神の名前、シャツダイはダンが指摘する通り「略奪、暴力、強奪」を意味する。「不名誉や不評、支配力や強奪、崩壊や荒廃、誤解や幻覚、悪摩とその誘惑は、神が名

付ける力がそうであるように、同じ言葉の中で私たちに示されるのである」⁽⁷⁹⁾。

神の代理である天使たちは、破壊する能力ではダンが想像するのとはほとんど同じくらい印象深い。「天使たちは被造物である。身体があるというよりむしろ肉であり、泡であり、蒸気であり、ため息である。しかし、ちよつと触れただけで天使たちは石をより小さな原子にしてしまう。それから石が元になっている砂とする。そして石臼が細かい粉にする。それで、石臼が回る」⁽⁸⁰⁾。粉を作り出すのは、実際に擦り砕く石臼であるが、もちろん私たちが調査するのを期待するものではない。ダンの天使は、ただかなり力があるという理由だけで電話帳を引き裂くような方法としては意味もなく純粋な力技を演じている。私たちは、途方もない力を秘めているがゆえに天使たちを崇めることになる。

さらに、ダン自身が神の御言葉の使者としてこの壮大な権能を分かちもっていることを感じる事ができた。説教壇によりかかる単なる老人というのではない。自らが地震であり、ライオンや滝であった。ダンが目指す表現力は、詩の中で述べられているこうであれば良いというようなものではなかった。ダンが目指す主権は、もはや傷つきやすい虚構ではなかった。主権は、聖なる真実であり、全能の父なる神がダンに宣言させようとしていることなのである。悔い改めていない罪深い会衆に勝つてより高く毅然と立ち、恐ろしいほどの力をもって威圧する。神の教会の中で会衆に伝える。

説教という神の定めが、魂を打ち砕き、その突破口を通じて、聖霊が入り込む。御言葉を伝える者たちは、地震となり、地上の魂を揺り動かす。稲妻の息子たちでもあって、

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

雲に覆われた良心を蹴散らす。また、滝のようでもあり、水と共に全ての会衆を運んで行く。一回の説教に三千人の会衆を、一回の説教に五千人の会衆を、一回の説教で二ネベのような町全体を、そして、御言葉を伝える者たちは、ライオンの吠え猛る声のようである、そこでは、ユダの種族であるライオンは、貪り食うかもしれないものを捜すライオンを罵倒する⁽⁸⁰⁾。

ダンが現在の地位に応募したとき、思い起こすのは、この地震と滝という言葉を用いて、バツキンガム伯爵に「貧しい虫」とか「一握りの土くれ」である自分自身を推薦した。生涯を通じて、ダンがとる上昇しようとする態度は、詩の中であれ、説教集の中であれ、この世的には失敗していると絶えず感じていることに對してだけではなく、その失敗を克服しようとして、ダンがやむを得ず自尊心を傷つける手段に對しても償いとして役立たねばならない。

このように見てみると、説教集というのは、詩が願ひ求めた全てを成就することであると見ることが出来る。詩の中で支配したいという欲求、ダンが個人的な愛を地球規模の重大なものに変えてしまう自己拡大、さらにダン自身の不和と心配を越えてしまう絶対的な完璧さへの渴きを見てきた。同様に、ダンが持っている国王の主権への情熱、技術的手段も見てきている。その手段によって、詩がその統語法やリズムから表現力を生み出している。たとえば『寝に行く恋人に』のような初期の詩集の中で、権力を使いたい気持ちがあるかのように侮辱し、恥をかかせ、罰するために一つの願ひを形づくったところを引き継ぎ、宗教を後ろ盾にして、同じように専制的に

目的を追求する。『寝に行く恋人に』が持つサディズムさえ、説教集の中で自然なくつろぎを見いだす。なぜなら、説教集の中で使うダンの破壊的な言葉使いは、単に一人の惨めで裸同然の女性に對してだけではなく、肉体的美しさすべてに向けられているからである。詩と説教の間にこの一致があるとすれば、初期の罪深いジャック・ダンと厳肅な聖ポール大聖堂のドクター・ダンとは、似ていないものとして見られるべきであったとか、またダン自身がそう見ていたというのも奇妙なことである。その異なった表現方法で、自己同一の感情を自由に描き出しているように思える。諷刺詩もまた、人間と社会を中傷したり、支配し、優勢な立場をとる傾向にあるけれども、完全に説教集との和解ができるように思える。ダンが説教の中で諷刺を非難しているのは本当である。しかし、説教を作るようになるまで、諷刺をする余裕があったのである。なぜなら、人類、すなわちキリスト教を攻撃するための諷刺よりはるかに効果のあるものを見つけてしまったからである。

もちろん、それはダンには重大なことであったけれど、ダンを魅了した神という概念に内在する破壊的な力だけであったということではない。全能であると同時に永遠であることで、神はダンが長年に渡って必要としてきたもう一つのことを満足させてくれたのである。神が永遠であることによって、ダンはや言葉や考えを越えて秘跡へ到達しようとする衝動へ完全に焦点を絞ることができた。表現できないことを表現し、考えられないことを考えようとすること自体が、野心を抱いてきたダンのあらゆる欲求の中で必然的に一番自滅的なことであった。しかし、それは性格自体の変わらぬ要素でもあ

ったし、権力を求めるように恋愛詩の中でもはっきりと識別できることでもある。主権を求める激しさが増すことで、詩の中では一目瞭然であるが、ダンは「せっかちな馬鹿もの」や「鈍感な地球上の恋人たち」だけでなく、言葉で表現しうることを越えて突進していく。

あらゆる節度、あらゆる言葉を踏み越えねば

彼女自身がどんな奇跡であつたのかは告げられない。⁽⁸¹⁾

最後に、その恋人は言葉だけではなく、考えをも超えていく。愛しているものを彼が知らない。ただ彼が知らないことだけ。

否定的な言葉でしか表現できないものが

一番完璧なものであるなら、

ぼくの愛こそまさしくそれだ。

世の人が愛する全てをぼくは否定する。

ぼくの知らぬもの、心の謎を読み解く人がいて

答えられるなら、

ぼくの求めるこのこの無の正体を教えて欲しい。⁽⁸²⁾

『否定する愛』というこの詩の中で、ダンの自己分析を伴った強迫観念と到達することのできないものへの情熱とが溶け込んでいる。二つのことは確かにそうなることになっていた。なぜなら、彼が自身自身の精神的過程に探りを入れようとすると、私たちが見てきたように、きまって自分が何者であるかは知りえないのだという状況で育てられたからである。まさにダンの頭の中には前人未到の高さ

や底知れぬ深みがあつたのである。内部の霧の中の明瞭な光線に目を見張り、他の誰も自分が知ると同じように自分の心を知ることできない、と自らに語った。「ぼくはなおこのことで悩む。なぜなら、そのことを知らないならば、誰も知ることはできないからである。」しかし、その企ては滅びると、ダンが理解した。精神はそれ自体を読むことはできないからである。(「精神の病気についての基準も聖典も規則もない。なぜなら、私たち自身の趣向や理解や解釈が裁判官になるからであり、そしてそれは病気そのものである」からである。⁽⁸³⁾ダンが並外れてそれに気づいていたが、頭の中のこの行き詰まりは、私たちが普通に経験していることの一部である。一度ダンが言葉にしてしまうと『否定する愛』を私たちは自分たちの愛だと認識する。愛される人の中で私たちが何を愛し、何故愛するのかは取り返しのつかないほどに理解を越えている。しかし、愛自体はとも自然に感じるので私たちは愛がどうか説明がつくと考えるのに慣れてしまっている。

ダンはずっと後退していく地平線に向かって加速するのが好きだし、自分の精神を捉えようとするのが、そうする一方法であつた。最も純粹な形式の中に野心の技法を表している。別の方法は考えもつかない独自性を作り出すことであつた。その独自性をその時考えようとした。『ソングズ・アンド・ソネット』の中でその独自性は常に愛であり、ある途方もない方法で定義される。例えば、『愛の無限』は、ダンがあらゆる女性の愛を手に入れるかどうか、あるいは、できるのかという問題を考える。⁽⁸⁴⁾最後の連につくまでには、ダンがそんなことを全て望んでいるわけではないと、心に決めてしまっているのは象徴的である。なぜなら、「すべて」というのは制限されすぎた概念だからである。

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

だが、すべてを手に入れる気にはまだならない。すべてを手に入れてしまえば、それ以上手に入れられない。ぼくの愛が日毎に成長するのが分かっているから。きみも貯えてある新しい褒美を手にいれるべきだ。

再び、これはダンがしている全く個人的な数学の遊びという訳ではない。恋人たちは信じ、あるいは信じたいと思っているのは、二人の愛がさらに増えることと同時に、よどまず成長することである。これらは一度情緒を数量化しようとするのと陥りやすい葛藤である。しかし、数量化された情緒を求めることはこの世では最も自然のことである。「どれくらい愛しているの」と子供なら誰もが発する質問である。

『愛の無限』の中でダンが愛を数量化しようとする努力とダンが愛のあらゆる数量の限度を越えさせようとする強い意志との間の緊張を感じることができる。『計算』のような詩の中で数量化された言葉は愛の効力に対してどれほど不十分な量であるのかを示すために明確に使われている。

昨日からはじめの二十年間
 信じられなかった。きみが行ってしまうことができたなんて
 さらに四十年間、ぼくは麗しい過去で命をつなぎ
 きみが望む希望で四十年間、希望は続くかもしれない
 涙が百年も溺れ、溜息が二百年も吹き消した
 千年は考えも行いもせず
 分らず、きみのことを一途に思いながらずっと
 もう千年の中でそれも忘れた。

しかし、これを長寿と呼んではいけない。ただ、ぼくが死んだまま、不死身になっていることを考えてくれ。亡霊は死ぬことができるのか。⁽⁸⁵⁾

ここでの年数は、注目されてきたように、加算すると二千四百年となる。二人が別れてから、一時間ごとに百年。しかし、それを強調することは、数字的に正確すぎるものへ詩を歪めてしまうことになる。その感情は数量化できるものではなく、無限である。詩がその巨大な年代記的な期間を自由奔放にかき乱すのは、時や数字が異なっていて、消失の経験以上に現実の深刻ではない領域に属していることを示すためである。別れている時間に、私たちはダンが意味することを感じてきたし、引き延ばされた時間やじつと立ち止まっている時間などの使い古された語句の中でそれを表現しようとしてきた。ダンが時間を止めないし、時を進めない。ダンが独創的であり、挑戦的であり、野心的な言葉の問題に直面する。数は計算能力を負かすのに使われる。量は数量化するのを無効にするために使われる。詩は、このような様々の方法で愛や女性を言語や思想を用いても追い出すことのできないものへ変えてしまう。説教集の中で神と永遠は愛や女性に取って代わるけれど、精神の限界をより高く飛翔しようとする気持ちは同じである。数え切れない数を数える技術は、『計算』の寂しい恋人が好んでするが、宗教的な目的へと変えられ使われる。ダンは直ちに二つの矛盾した事柄を扱うためにそれを応用する。会衆の心を永遠の思いで満たすために、さらに永遠が人間の思いの限界内にもたらされ得ないことを会衆に印象づけるためである。「何百万年、何百年の倍でもこの永遠に一分も近づかない」とダンは会衆に語る。永遠とは「聖書の中で一番長い単位である一

千年ではなく、一兆年もの世代のような一日」であるだろう。人生七十歳の後で、地獄に落ちた亡霊たちは「七億年の苦痛の世代」に直面する。神は「無限、超無限、天地創造以前の想像を絶する空間、何十億もの想像を絶する天の空間」の存在であった。

そして、さらに。「超無限」という言葉はダンの造語である。ダンはそのが好きだったし、再度使った。永遠はダンヴァーズ夫人の記念説教の中で「超無限の永遠」である。野心の技法にとって「超」と名の付くものは特別に人に訴える接頭辞である。なぜなら、それはその言葉が書かれていなくても、選ばれたどんな単語も取りやめたり、限界を越えたりするからである。これは言葉が言葉を越えて到達する努力を補強する。言葉はダンが信仰的発作の中で、常に分離できる。接頭辞についてOEDの記述はダンのものであり、例えば、「super-canonicalization」「super-Catholiclike」「super-dying」「super-educations」「super-Reformation」「super-universal」などである。そのリストは暗示的であるが、確かに完全ではない。「superexaltation」などは説教集の一頁に見ることができるだけである。⁸⁸⁾「superinfinite」という語は言う必要もないが、何の意味もないのである。無限は何も付け加えることができないものだからである。しかし、その言葉には意味がないことで、ダンの目的に叶い、悪いことはない。なぜなら、精神が理解する範囲を越えて定着するからである。

増殖は同様にダンが聞き手を動揺させ、終わりのない宇宙の時間の永劫を倍加するように提案するのに好んで使われる技法である。ダンは「どんな百万も百万を掛けては計算できない」という数を取り扱っているのを説明する。人間は地上に六千年もいた。「しかし、もし人間の六千年を分にして、時代を掛ければ、全ては無になるで

あろう。その永遠の観点からみれば、単なる無であり、そこに住むことになる。⁸⁹⁾詩人は『愛の無限』の中で永久に倍加してゆく愛を望んでいたけれど、いまや、永久に倍加していく至福を約束している。「なぜなら、天国と救いは創造ではなく、増殖であるからである。我々が死ぬとき始まるのではなく、それが増大し、それ自体そのとき無限に膨張するのである」。⁹⁰⁾

エリザベス朝時代の人々と同じく、ダンには実際に真面目に計算をしようと思つて数を使う興味は全くなかった。ダンの時代の数字に関する一般的な基準といえば極端に低かった。⁹¹⁾算数は学校で教えていなかった。人文主義者たちは算数を機械的に習得するものとして軽蔑していた。エラスムスは算数など半可通で十分だ、と言つたし、アスカムは数学は「人々が他の人と上手に生活できない」ようにするので不健康だと考えていた。もつと現代的な精神の持ち主である十七世紀の校長でさえ、アラビア数字を認識できるようになれば学校の生徒がグラマースクールの生徒の必要とする十分な量の数学であると考へた。そして、この程度の能力が決して普遍的ではなかった。大学で勉強している学生が本の頁や章の数字を判読できないのが普通だった。一般的には数字に弱いと国家の仕事が進まなかった。その時期の人口推計は計算する人間の雰囲気以上にほとんど反映していないし、残されている記録文書は貧民救助法の救貧委員たちが正確に数字の欄をめぐつたに埋めることができなかつたことを示している。

このような状況で増殖にちよつと触れるだけでダンは会衆に麻醉でも与えるように感動させてしまい、ダンがそれとなく言う大きな数字は現代の我々が考える以上に訳がわからないときえ思えるであろう。ダン自身の数字の扱い方はたぶん平均より上であつたであつ

た。というのもグラマースクールに行かなかつたし、カトリック教徒の家庭教師が教えてくれたからである。しかし、ダンはいかに好奇心で数学を見ていたらしい。日常的には数学に無頓着であった。著者を引用するとき、間違つた頁や巻を取らないようにしているようである。そしてダンは『神学論集』の中で地球の人口は時代を通じて一定を保っていたと推測されるかもしれないと軽率にも述べる。その記述は統計的な資料から恩恵を受けてるかもしれないと疑つてはいないようである。⁽⁸²⁾ 明確にすることより調節するための数の使用方は説教集の中で注目されるが、ダンの性格に合つていた。ダンから数学の目的は思想を助けるためではなく、数学で衝撃をあたえることであつた。

意味深いことにダンの好奇心をそそつた一つの当時の数学的計算法は反動的なドイツ人イエズス会士で天文学者、クリストファー・クラヴィウスの作品だつた。彼は地球と星の間の全空間を満たすために必要な砂粒の数の概算を一六〇七年に出版した。(その答えを得るために数字の一を書き、その後五十一の〇を置きなさい)クラヴィウスは正確さを目指してはいなかつた。関心があつたのは、自分が示した数が十分に大きいことを確実にすることであり、実際のところ天空が一杯になつてしまつても相当量の砂が残るであろうと信じていた。このことを確かめるために、クラヴィウスは合計するとき自分の基準として小ぶりの砂粒を故意に選び、自分が信じている以上に大きな容積を宇宙のものにしてしまつた。クラヴィウスが想定した規範はアルキメデスのアレナリウスであつた。アルキメデスのように単純に数の力を示そうとしていた。クラヴィウスが示したいと思つていた数は普通に無限と見られていたものさえ表現することができた。⁽⁸³⁾

ダンの目的は全く反対のことであつた。従つて、ダンが(繰り返して述べるように)クラヴィウスの計算に言及するとき、その全体の要点を破壊したり、クラヴィウスに逆らつて、数が不適當であることを重ねて主張する文脈の中で使用する。一六二七年の説教でダンが罪人である人間に下す神の永遠の呪いを観想するのは、典型的である。

人間は如何に沢山の特殊な砂粒が地球と天空の間の巨大な空間すべてを埋め尽くすのか、と計算してきた。そして分かるのは、数行の暗号文がその数を予測し、表すのである。しかし、もし砂粒の一つひとつがその数で、再び倍になるとしても、なおその全て、それを表記できもしなければ思ひもよらない数の全てがこの永遠のうちの一分を埋め合わせはしなかつたし、この呪いも、またその数の中に砂粒があるように沢山の世代に渡つて持ちこたえてきた期間より短い一分にもならないだろう。⁽⁸⁴⁾

数学者たちはその程度であつた。

知り得るのは、この種のダンの居場所を望んでいることと計算可能な知識の天球を越えて、すなわち混乱する知識を越えてダンが価値があるとする事柄の激しさの中である。見てきたように、『否定する愛』は同じ欲望を明確にするし、誰について、あるいは何について表現するのをほとんど一心に拒否しようとする詩が『ソングズ・アンド・ソネツ』の中には存在する。例えば、『呪い』はダンの恋人が誰なのかと憶測などする者に対して毒舌を発する。

ぼくの恋人が誰なのかと推測したり、考えたり、知っているなどと夢見たりする奴は、この呪いで萎えろ⁽⁹⁾

満たされない、満たし得ないダンが持つ気性の要求と同じく明白にその前兆となっている。

そして『偉業』が伝えなければならぬことは、伝えぬことなのである。

ぼくは九人の英傑たちの全てより

もっと勇ましいことを成し遂げた。

しかし、そこからもっと勇ましいことが生まれるぞ。

それは、その偉業を隠したままにしておくこと。⁽¹⁰⁾

この詩の中でダンが楽しむ「魅力」は純粹に私的なこととして提示されている。そのことを口に出せば冒瀆になるであろう。本質的にその詩は今まで見てきた他の詩『日の出』や『周年詩』のように、また神の力についての熱弁や説教集の中のダンが引用する聖職者たちのようにダン自身が傑出していることを宣言しているのである。その詩はダン自身を他の人たちやその知り合う方法から区別するだけではなく、自分自身を比較することで、他の人たちをけなす必要を満たしている。この必要性がこの章の中で野心の技法と呼んだものの基礎なのである。

それはもちろん個人的な心配事のしるしでもある。最高のところで注目してきた詩は平然と無視するかのようにこの心配事を伝える。詩は内部の不確かな感情の傷のない記念碑のように存在するのではなく、その感情が声を出し、行動するのを許す。説教集の中ではつきりと疑いや不安を抑圧しようとする固い決心がある。しかし、結果は風からはほど遠い。ダンの信仰の修辭的文体の激しさは、詩が

一、原注

- (1) Edward Edwards, *Life of Raleigh* (1868), ii, 152-3, quoted in Bald, 83.
- (2) *Satires*, 50.
- (3) *The Collected Works of Isaac Rosenberg*, ed. Ian Parsons (1979), 183.
- (4) *Biathanatos*, 137.
- (5) *Sermons* ii, 266.
- (6) *Sermons* v, 106.
- (7) *Sermons* iii, 139; vi, 304; viii, 278; on the vagabond problem W. K. Jordan, *Philanthropy in England, 1480-1660* (1959), i, 78-95. を参照。
- (8) Gosse i, 128.
- (9) *Sermons* vii, 370-91.
- (10) *Sermons* ix, 381.
- (11) Robert Ellrodt, *L'Inspiration personnelle et l'esprit de temps chez les Poètes métaphysiques anglais* (Paris, 1960), I, i, 106-16.
- (12) *Elegies*, 37.
- (13) *Elegies*, 87.
- (14) *Elegies*, 76.
- (15) Gosse i, 174.
- (16) *Epithalamions*, 67.
- (17) Gosse i, 184.

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

- (18) *Sermons* viii, 332.
- (19) Ellrodt, op. cit., I, i, 107.
- (20) *Elegies*, 61-2.
- (21) Helen C. White, 'John Donne and the Psychology of Spiritual Effort' in *The Seventeenth Century*, ed. R. F. Jones (Stanford, Calif., 1951), 357. 参考文献
- (22) *Sermons* viii, 75.
- (23) *Epithalamions*, 43, 42, 24, 45.
- (24) Jonson i, 133.
- (25) William Empson, 'Donne and the Rhetorical Tradition', *Keryon Review* 11 (1949), 579.
- (26) Marius Bewley, 'Religious Cynicism in Donne's Poetry', *Keryon Review* 14 (1952), 619-46.
- (27) D. W. Harding, 'Coherence of Theme in Donne's Poetry', *Keryon Review* 13 (1951), 427-44.
- (28) Richard E. Hughes, *The progress of the Soul* (1969). 参考文献
- (29) *The Anniversaries*, ed. Frank Manley (Baltimore, Md., 1963).
- (30) B. K. Lewalski, *Donne's 'Anniversaries' and the Poetry of Praise* (Princeton, N. J., 1973).
- (31) Gosse i, 302, 306.
- (32) R. C. Bald, *Donne and the Drymvs* (Cambridge, 1959), 26.
- (33) *ibid.*, 88.
- (34) See I. A. Shapiro, 'The Date of a Donne Elegy and its Implications', in *English Renaissance Studies Presented to Dame Helen Gardner* (Oxford, 1980), 141-50.
- (35) *Elegies*, 14-16.
- (36) *Sermons* ix, 79.
- (37) Nashe, *Works*, ed R. B. McKerrow (Oxford, 1958), iv, 397-416.
- (38) *Elegies*, 72-3.
- (39) *Divine Poems*, 33.
- (40) *Elegies*, 71-2.
- (41) Shakespeare, *Antony and Cleopatra*, IV, xiv.
- (42) D. H. Lawrence, *Three Novellas* (Penguin edn., 1970), 79-80.
- (43) *Sermons* vii, 128.
- (44) *Sermons* ix, 64.
- (45) *Sermons* i, 223; v, 85; i, 247; iv, 347.
- (46) *Sermons* ix, 129.
- (47) *Sermons* iii, 289; iv, 137, 250; iii, 184.
- (48) *Sermons* iii, 290.
- (49) *Sermons* vi, 245.
- (50) *Sermons* vi, 283; vii, 157.
- (51) Baird D. Whitlock, 'The Dean and the Yeoman', N & Q 199 (1954), 374.
- (52) *Sermons* ii, 303.
- (53) *Sermons* ii, 290; ix, 328.
- (54) *Sermons* ix, 379; vi, 303; iii, 270.
- (55) *Sermons* ix, 379; iii, 58.
- (56) *Sermons* iv, 329.
- (57) *Elegies*, 61.
- (58) Milton, *Christian Doctrine*, I, v and vi, in *Complete Prose Works* (New Haven, Conn, 1973), vi.
- (59) *Sermons* iv, 28 and 33-4.

- (60) *Elegies*, 24.
- (19) Coleridge, *Miscellaneous Criticism*, ed. T. M. Raysor (1936), 131.
- (2) *Elegies*, 23.
- (29) Josephine Miles, 'fs, *Ands, Buts for the Reader of Donne*, in *Just So Much Honour*, ed. Peter A. Fiore (State College, Pa., 1972), 272-91.
- (64) *Epithalamions*, 30.
- (65) *Elegies*, 52.
- (66) Tennyson, *Poems*, ed. Christopher Ricks (1969), 496.
- (67) *Epithalamions*, 30.
- (68) *Divine Poems*, 28.
- (69) *Essays in Divinity*, 36.
- (70) *Satires*, 76-7.
- (71) *Divine Poems*, 30-1.
- (72) *Divine Poems*, 13.
- (73) *Elegies*, 63.
- (74) *Elegies*, 69.
- (75) *Elegies*, 85.
- (76) *Sermons* vii, 152; ix, 195; ii, 147, 194; i, 176-7; vii, 80; ii, 86.
- (77) *Sermons* viii, 128; vii, 65.
- (78) *Sermons* vii, 365-6; iii, 191.
- (79) *Sermons* viii, 106.
- (80) *Sermons* vii, 396.
- (81) *Elegies*, 90.
- (82) *Elegies*, 56.
- (83) Gosse i, 184.
- (84) *Elegies*, 77-8.
- (85) *Elegies*, 36.
- (98) *Sermons* vii, 78, 138; vi, 278, 363.
- (78) *Sermons* viii, 92.
- (88) *Sermons* x, 243.
- (68) *Sermons* iii, 349; viii, 76; 聖聖聖 ii, 139, 227, 357. 聖聖聖
- (66) *Sermons* iii, 339.
- (16) See W. K. Jordan, *Philanthropy in England, 1480-1660* (1959), i, 36, 129; John Brinsley, *Ludus Literarius*, ed. E. T. Campagnac (1917), 25; Foster Watson, *The Beginning of the Teaching of Modern Subjects in England* (1909), 254, 277-336.
- (26) *Essays in Divinity*, 72.
- (36) Christophori Clavii, *In Sphaeram Ioannis De Sacro Bosco Commentarius* (Lugdini, 1607), 253 聖聖聖 聖聖 聖聖 The Armerius of Archimedes, trans. G. Andersen (1784), which contains a translation of Clavius's dissertation; and C. M. Coffin, *John Donne and the New Philosophy* (New York, 1958), 88. 聖聖聖
- (76) *Sermons* vii, 368.
- (56) *Elegies*, 40.
- (36) *Elegies*, 57.